史跡 筑前国分寺跡

発掘調査及び環境整備事業実施報告書II

福岡県文化財調査報告書　第118集

1994

福岡県教育委員会

史跡 筑前国分寺跡

発掘調査及び環境整備事業実施報告書II

福岡県文化財調査報告書　第118集

平　成　6　年

福岡県教育委員会

筑前国分寺跡整備後の状況（東南から）

序

この報告書は，福岡県教育委員会が国庫補助を受けて，平成２年度から４年度にかけて実施した史跡筑前国分寺跡の環境整備事業の概要と，その基礎資料を得るために行った発掘調査の概要であります。

環境整備事業の目的は，遺跡を単に保存するだけでなく，これを公開し活用を図るため，発掘調査結果を基にして遺跡の表示や復原を行うものであります。本県としましては，太宰府歴史公園整備計画に基づいて昭和48年以降，学術的調査とその成果を踏まえた遺構の平面復原及び修景事業を継続的に実施しているところであります。

発掘調査及び環境整備事業の実施にあたっては，大宰府史跡調査研究指導委員の方々をはじめ，文化庁関係各位の御指導と御助言を賜りました。また，太宰府市教育委員会ならびに地元の方々の御協力を頂きましたことに対し，深く感謝の意を表します。

この報告書が，今後の文化財保存と整備，活用を図るうえでお役に立てれば幸いに存じます。

平成６年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　光安常喜

例　　言

1．この報告書は，国庫補助を受けて平成2年度から4年度にかけて実施した史跡筑前国分寺跡の環境整備事業と，その基礎となる資料を得るために実施した発掘調査の記録である。

2．この環境整備及び発掘調査の関係者は下記のとおりである。

福岡県教育庁指導第二部文化課	課　長	森山良一
福岡県立九州歴史資料館	館　長	田村圓澄（前任）
	館　長	吉久勝美

3．環境整備事業協力者

太宰府市教育委員会

太宰府市大字国分地区

4．環境整備事業にあたっては，大宰府史跡調査研究指導委員会の委員，文化庁担当官，大宰府史跡整備対策委員会の委員の方々の御指導を受けた。また，特に指導委員会の委員のうち地元委員からなる小委員会の委員の方々の多大な御指導，御助言を頂いた。

5．本報告書の執筆分担は下記の通りである。

Ⅰ・Ⅱは文化課川述昭人，Ⅲ1～3は九州歴史資料館栗原和彦，Ⅲ4(1)は九州歴史資料館横田賢次郎，Ⅲ4(2)は栗原，Ⅳ1・2・5は元文化課（現在福岡農業高校）大塚健，Ⅳ3は元文化課（現在南筑後教育事務所）浜田信也，Ⅳ4は文化課川述が担当した。

6．発掘及び整備終了後の写真は九州歴史資料館石丸洋が撮影し，整備状況写真は工事請負業者によるものである。遺構図面は各調査員が作成し，遺物の実測は栗原，横田(賢）があたり，製図は豊福弥生が担当した。

7．本報告書の編集は，浜田信也，木下修の授助を得て川述昭人が担当した。

本 文 目 次

Ⅰ はじめに …… 1

Ⅱ 位置と環境 …… 3

Ⅲ 発掘調査概要 …… 5

1 発掘調査の経過 …… 5

2 平成2年度の調査（第12次調査） …… 6

3 平成4年度の調査（第18次調査） …… 11

4 出土遺物 …… 12

(1) 土 器 …… 12

(2) 瓦 類 …… 14

Ⅳ 環境事業整備概要 …… 19

1 はじめに …… 19

2 平成2年度の整備概要 …… 22

3 平成3年度の整備概要 …… 25

4 平成4年度の整備概要 …… 27

5 おわりに …… 29

挿　図　目　次

第１図　筑前国分寺跡周辺古代寺院分布図（１／25000）…… 4
２図　筑前国分寺跡発掘進捗状況図（１／1000）…… 7
３図　回廊北側遺構実測図（１／100）…… 8
４図　回廊東側遺構実測図（１／100）…… 9
５図　回廊東北隅遺構実測図（１／100）…… 8～9
６図　塔跡遺構実測図（１／100）……10～11
７図　僧房跡推定地遺構実測図（１／100）……12～13
８図　出土土器実測図（１／３）……13
９図　出土軒瓦拓影図（１／４）……15
10図　出土瓦類拓影図（１／４）……17
11図　筑前国分寺跡整備範囲図（１／1000）……21
12図　塔・回廊跡整備計画図（１／400）……23
13図　塔跡整備計画図（１／200）……24
14図　塔跡瓦積基壇・階段断面図（１／20）……25
15図　回廊・雨落溝断面図……26
16図　回廊跡縁石部・雨落溝・回廊土留板柵断面図（１／30）……27
17図　僧房跡推定地整備計画図（１／400）……28～29

図　版　目　次

巻頭図版　筑前国分寺跡整備後の状況（東南から）
図版１　筑前国分寺全景（発掘調査前）
図版２(1)　筑前国分寺塔跡全景
(2)　筑前国分寺塔跡西側発掘調査状況
図版３(1)　塔跡基壇南辺石積状態
(2)　塔跡基壇南辺瓦積状態
図版４(1)　塔跡基壇北辺石積状態
(2)　塔跡基壇南辺石組階段出土状態
図版５(1)　筑前国分寺第12次調査Ａトレンチ全景
(2)　筑前国分寺第12次調査Ａトレンチ溝１
図版６(1)　筑前国分寺第12次調査Ｂトレンチ全景
(2)　筑前国分寺第12次調査トレンチ北面回廊跡北側雨落溝

(3) 筑前国分寺第12次調査Bトレンチ土壙5
図版7(1) 筑前国分寺第12次調査Cトレンチ全景
(2) 筑前国分寺第12次調査Cトレンチ土壙
図版8(1) 筑前国分寺第12次調査旧園路部分発掘調査状況
(2) 筑前国分寺第12次調査Dトレンチ
(3) 筑前国分寺第12次調査下トレンチ
図版9(1) 筑前国分寺第18次調査区（推定僧房跡）全景
(2) 筑前国分寺第18次調査区（推定僧房跡）全景
図版10(1) 筑前国分寺第18次調査柵列1・2
(2) 筑前国分寺第18次調査集石土壙
図版11 筑前国分寺第12・18次調査出土土器・瓦類
図版12 筑前国分寺第12・18次調査出土瓦類
図版13(1) 整地工事状況
(2) 整地工事状況
(3) 塔跡盛土工事状況
(4) 塔跡盛土工事状況（洗砂使用）
図版14(1) 塔跡盛土転圧状況
(2) 塔跡基壇基礎配筋状況
(3) 塔跡基壇基礎コンクリート打節
(4) 塔跡基壇石積み状況
図版15(1) 塔跡基壇石積み状況
(2) 塔跡基壇石積み状況
(3) 塔跡基壇瓦積み状況
(4) 塔跡基壇瓦積み状況
図版16(1) 塔跡基壇瓦積み状況
(2) 塔跡基壇南側石組階段工事
(3) 塔跡模造礎石据付床掘状況
(4) 塔跡模造礎石据付状況
図版17(1) 塔跡基壇表層土壌固化舗装状況
(2) 塔跡基壇表層土壌固化舗装状況
(3) 園路路盤工事
(4) 園路路床（クラーシャーラン）転圧状況
図版18(1) 園路L型側溝付設状況
(2) 園路路盤工事転圧状況
(3) 園路土壌固化舗装下層工事

(4) 園路土壌固化舗装上層工事

図版19(1) 水路改修路盤工事

(2) 水路改修 U 字型側溝付設状況

(3) ガードパイプ付設状況

(4) 水路改修溜桝工事

図版20(1) 水路改修暗渠排水工事

(2) 水路改修暗渠排水工事

(3) 暗渠排水ヒューム管埋設状況

(4) 車止め石柱設置状況

図版21(1) 北面回廊整備前

(2) 北面回廊整備後

(3) 北面回廊北側整備前

(4) 北面回廊北側整備後

図版22(1) 塔跡東側整備前

(2) 塔跡東側整備後

(3) 南面回廊整備前

(4) 南面回廊整備後

図版23(1) 塔跡雨落溝床掘り状況

(2) 塔跡雨落溝石積み基礎工事

(3) 塔跡雨落溝石積み基礎

(4) 塔跡雨落溝石積み状況

図版24(1) 塔跡雨落溝床路盤工事

(2) 塔跡雨落溝床コンクリート打設状況

(3) 塔跡雨落溝床掘り状況

(4) 回廊跡雨落溝路盤工事

図版25(1) 回廊跡雨落溝石積基礎コンクリート打設状況

(2) 回廊跡雨落溝石積基礎

(3) 回廊跡雨落溝石積み状況

(4) 回廊跡雨落溝石積み状況

図版26(1) 回廊跡雨落溝床路盤工事

(2) 回廊跡雨落溝床コンクリート打設状況

(3) 回廊跡基壇法面工事

(4) 回廊跡基壇縁石据付床掘り状況

図版27(1) 回廊跡基壇縁石据付路盤工事

(2) 回廊跡基壇縁石据付基礎コンクリート打設状況

(3) 回廊跡基壇縁石据付基礎工事

(4) 回廊跡基壇縁石据付状況

図版28(1) 回廊跡基壇土盤整備状況

(2) 回廊跡基壇路盤工事

(3) 回廊跡基壇舗装プライムライト乳剤散布状況

(4) 回廊跡基壇舗装工事

図版29(1) 回廊跡基壇アスコン舗装表層乳剤散布状況

(2) 回廊跡基壇脱色アスファルト舗装工事

(3) 回廊跡内側整地転圧状況

(4) 回廊跡内側整地状況

図版30(1) 回廊跡内側路盤工事

(2) 回廊跡内側路盤工事

(3) 回廊跡内側土壌固化舗装工事

(4) 回廊跡内側土壌固化舗装転圧状況

図版31(1) 回廊跡雨落溝砂利敷状況

(2) 塔跡雨落溝砂利敷状況

(3) 張芝整地工事

(4) 張芝工事

図版32(1) アラカシ植栽状況

(2) アラカシ植栽状況

(3) アラカシ植栽状況

(4) アラカシ植栽状況

図版33(1) サツキツツジ植栽状況

(2) サツキツツジ植栽状況

(3) 回廊基壇土留板柵工事

(4) 回廊基壇土留板柵工事

図版34(1) 整備後の状況（東南から）

(2) 整備後の状況（北から）

図版35(1) 整備後の塔跡（南から）

(2) 整備後の塔跡西側瓦積み階段

図版36(1) 講堂跡瓦積階段修理工事

(2) 講堂跡瓦積階段修理工事

(3) 講堂跡瓦積階段修理工事

(4) 講堂跡瓦積階段修理完了状況

図版37(1) 講堂跡礎石据付工事

(2) 講堂跡礎石据付け状況
(3) 講堂跡東側丸太階段据付工事
(4) 講堂跡東側丸太階段据付け状況
図版38(1) 僧房跡推定地整備前の状況
(2) 僧房跡推定地整地工事
(3) 僧房跡推定地整地工事
(4) 僧房跡推定地整地工事
図版39(1) 排水溝付設路盤工事
(2) 排水溝付設路盤工事
(3) 排水溝付設工事
(4) 排水溝付設状況
図版40(1) 法面整地工事
(2) 法面整地工事
(3) 法面張芝工事
(4) 法面の張芝の状況
図版41(1) 講堂跡東側暗渠配水管付設状況
(2) 講堂跡東側暗渠配水管付設工事
(3) 講堂跡東側植栽状況
(4) 講堂跡南側植栽状況
図版42(1) 僧房跡推定地植栽状況
(2) 僧房跡推定地植栽状況
(3) 僧房跡推定地植栽状況
(4) 僧房跡推定地整備完了状況

表　目　次

第1表　筑前国分寺跡年度別環境整備一覧……20

Ⅰ はじめに

筑前国分寺跡は，隣接する国分瓦窯跡とともに大正11年10月12日付けで国史跡として指定された。その後，昭和35年１月に国分寺の国宝仏像収蔵庫が建立されるに際して，最初の学術調査が行われた。昭和43年からは福岡県教育委員会による大宰府史跡の発掘調査の開始に伴い，その一連の調査として筑前国分寺跡の調査が昭和49年から始められ，その調査結果をもとに国庫補助事業による史跡筑前国分寺跡の環境整備事業が前後二次期にわけて継続的に実施された。このうち，昭和50年度から55年度までに実施した整備事業の概要については既に報告済みであるため，本報告書の中では，平成２年度から４年度にかけて実施した環境整備事業とその資料を得るために実施した発掘調査の内容についての報告を行う。

発掘調査及び整備事業の関係者は下記のとおりである。

平成２年度

（発掘調査）

九州歴史資料館

	館長	田村 圓澄
調査課	課長	栗原 和彦
	参事補佐	橋口 達也
	技術主査	横田賢次郎
	主任技師	赤司 善彦
	主任技師	吉村 靖徳

（環境整備）

福岡県教育庁指導第二部

文化課	課長	六本木聖久
	課長技術補佐	石松 好雄
	参事補佐	大塚 健（整備担当）

工事請負業者　羽野組

平成３年度

（環境整備）

福岡県教育庁指導第二部

文化課	課長	森山 良一
	参事	石松 好雄
	参事補佐	浜田 信也（整備担当）

実施設計　中桐造園設計研究所

工事請負業者　羽野組

平成４年度

（発掘調査）

九州歴史資料館

館長　吉久 勝美

	副　館　長	石松　好雄
調査課	課　　長	栗原　和彦
	参事補佐	横田賢次郎
	主任技師	小田　和利
	主任技師	吉村　靖徳
	調査補助員	斎部　麻矢（現在文化課技師）

福岡県教育庁指導第二部

文化課　参事補佐　川述　昭人

（環境整備）

福岡県教育庁指導第二部

文化課	課　　長	森山　良一
	参　　事	柳田　康雄
	参事補佐	川述　昭人（整備担当）

実施設計　中桐造園設計研究所

工事請負業者　宮原土木建設

大宰府史跡調査研究指導委員会の委員は下記のとおりである

平野邦雄（委員長）	東京女子大学名誉教授	国史
笹山晴生	東京大学教授	国史
八木　充	山口大学教授	国史
川添昭二	福岡大学教授	国史
狩野　久	岡山大学教授	国史
坪井清足	財団法人大阪文化財センター理事長	考古学
横山浩一	九州大学名誉教授	考古学
小田富士雄	福岡大学教授	考古学
西谷　正	九州大学教授	考古学
鈴木嘉吉	奈良国立文化財研究所長	建築史
澤村　仁	九州芸術工科大学名誉教授	建築史
中村　一	九州造形短期大学教授	造園学
杉本正美	九州芸術工科大学教授	造園学
渡辺定夫	東京大学教授	都市工学

大宰府史跡整備対策委員会

この委員会は大宰府関係史跡が指定されたのを受けて，広範な史跡の整備について各方面からの意見を求めて審議するため，昭和46年2月18日に地元関係者・学識経験者・行政関係者の3者から構成されている。このうち，下記の地区代表の方々に多大なお世話になった。

萩尾正敏	国分地区代表	井上　悟	観世地区代表
大田清人	坂本地区代表	井上義一	四王寺地区代表
吉塚駿亮	観世地区代表		

Ⅱ 位置と環境

筑前国分寺跡は福岡県太宰府市大字国分に所在し，隣接する国分瓦窯跡とともに大正11年10月12日に国史跡として指定された。筑前国分寺跡は特別史跡大宰府政庁跡の北西約１㎞の郭外に位置する。遺跡は，史跡大野城跡が所在する四王寺山麓から西南に派生する台地の先端近くに位置しており，西側へ傾斜した地形の約200ｍ程の場所には，従来からの推定国分尼寺跡が所在するが，最近の発掘調査結果からは，先に推定されていた地点よりさらに西方約100ｍの地点に，方一町程度の寺域を推定することが可能となっている。

また，東北に200ｍ程離れた位置には，国分寺の瓦を焼いた国分瓦窯跡がある。瓦窯跡は現在ため池の中にあって見学することができないが，ため池が造られる前には計７基の窯跡が確認されている。現在はそのうち２基だけが破壊されずに保存されている。調査された１基の窯跡は丘陵の斜面をくりぬいて構築された地下式有階段登窯で，規模は高さ1.5ｍ，中央部幅1.5ｍ，全長5.3ｍを測り，内面は日干し煉瓦で築かれている。

大宰府跡北西の大野城市との境界には，全長約1.2㎞，高さ13ｍ，基底部の幅約80ｍの巨大な土塁である特別史跡水城跡がある。この「水城」は天智天皇３年（664）に国土防衛のために築造されたものであり，古代においてこの地が要衝の地であったことがうかがえる。南面する背振山麓の北東に延びる支脈には，大野城跡と同じく天智４年（665）年に築かれた朝鮮式山城の基肄城があって大宰府の防備を固めている。東には，史跡学校院跡及び観世音寺子院跡がある。

周辺部には古代寺院跡も多く，白鳳時代の塔ノ原廃寺跡，奈良時代の般若寺跡，杉塚廃寺，天平時代の観世音寺，安楽寺があり，時代は降るが武蔵寺跡等がある。

最近の発掘調査の成果から，政庁跡南方の大字向佐野の宮ノ本遺跡は奈良時代から平安時代前半の墳墓群が営まれていたことがわかり，このうち，平安時代前半の１基の頃墓からは調査では初めての発見である鉛製の買地券が出土した。また，大字宰府字鉾ノ浦遺跡跡からは，工場に相当する建物跡や，その関連する遺構，遺物として，こしき炉，たたら，鋳造土壙，鋳型等が出土した。この遺跡は，全国でも稀な梵鐘の鋳造工場跡と言えるものであり，中世の鋳物生産を解明する上で重要である。

国分寺跡の南方からは，御笠団印・遠賀団印が出土しており，これらの発見から，国分寺の南方部分に国府が所在した可能性も指摘されている。

1．観世音寺　2．筑前国分寺　3．筑前国分尼寺　4．原山無量寺
5．安楽寺　6．浄妙寺（榎寺）　7．般若寺　8．杉塚廃寺
9．塔原廃寺　10．武蔵寺

第１図　筑前国分寺跡周辺古代寺院分布図（１／25000）

Ⅲ　発掘調査概要

1　発掘調査の経過

今回報告する史跡筑前国分寺関係の発掘調査は，1990・92（平成２・４）年に実施したものである。

こまれでの筑前国分寺関係の発掘調査結果の概要は，

1）　筑前国分寺－昭和51年度発掘調査概要－　福岡県教育委員会　1977

2）　筑前国分寺－昭和52年度発掘調査概要－　福岡県教育委員会　1978

の２冊で，塔跡・講堂跡・東面回廊跡・推定南門付近などを報告し

3）　史跡筑前国分寺跡および国分瓦窯跡－環境整備事業実施報告書－　福岡県教育委員会 1980

の中で，寺域東限と推定される遺構・僧房推定地について報告した。

上記三冊の報告書で筑前国分寺の主要な遺構の報告は一応終了している。今回，報告しようとする筑前国分寺第12次の発掘調査は，1990年の塔跡の環境整備・1991年の回廊跡・付替園路工事のための事前調査であり，第18次の発掘調査は講堂北側（僧房推定地）の発掘調査である。

イ　第12次発掘調査

筑前国分寺の環境整備事業は1980年までに回廊跡・講堂跡の基壇整備と周辺の芝貼り工事を終っていた。環境整備事業未了箇所として塔跡を残しているだけであった。

この為に，大宰府史跡の整備事業を担当する福岡県教育庁指導第二部文化課（以下文化課と記す）は，塔跡の整備工事を計画した。さらに回廊跡では，環境整備事業実施後10年を経過したことで回廊基壇両側の砂利敷雨落溝が芝によって埋もれ，回廊基壇との区別がつかない状況であるため，この部分の手なおしも計画された。

また，当時園路は現国分寺の東側に沿って作られていて，周辺居住者の生活道路として使用されていた。この園路が塔跡基壇の西北隅・金堂跡近くの回廊上を通過していたことから，新たに園路を回廊跡の東側に設置しなおすことが必要となった。

文化課はこの整備計画案を平成２年度大宰府史跡調査研究指導委員会（平野邦雄委員長以下12氏で構成。以下指導委員会と記す）に諮問した。指導委員会はこの計画案を検討した結果，環境整備計画案全体については了承するとし，以下の２点の付帯条件をつけた。

その条件とは，発掘調査を未発掘部分で実施する必要があること。（新たに設置しようとする園路部分。北面回廊跡。当時使用していた園路の塔跡西側部分と北面回廊を横断する部分。）

また，発掘調査結果の検討とそれに基づく環境整備実施設計の検討を，大宰府史跡調査研究小委員会（横山浩一副委員長以下４氏の地元委員で構成，以下小委員会と記す）に指導を仰ぐことの２点である。

このことに基づき実施した発掘調査を筑前国分寺第12次調査と呼ぶ。発掘調査は文化課の依頼を受け九州歴史資料館調査課が実施した。

筑前国分寺第12次調査経過概要は以下のとおりである。

1990年９月５日　太宰府市国分地区で整備工事に関する地元説明・協議。

９月６日～11日　調査予定地の地形測量実施。

9月12日　北面回廊跡・新設園路部分のトレンチ設定。

9月17日　バックフォーで表土除去。発掘機材搬入。

9月18日　発掘調査開始。

9月21日　遺構検出開始。

10月15日　遺構検出終了。写真撮影，塔跡表土除去作業開始，実測準備。

10月24日　実測終了。

10月25日　小委員会開催，調査終了。

以上で北面回廊跡・新設園路計画地の調査を終了した。小委員会の意見を参考に実施設計が出来，1991年1月末に工事受注者が決定し，2月12日から2月26日まで旧園路部分（塔跡西側および回廊通過部分）の発掘調査を実施した。3月1日発掘区の写真撮影を行って調査を終了した。

□　第18次発掘調査

1992(平成4)年，文化課は筑前国分寺環境整備事業の最終事業計画として，講堂跡北側の第8次調査区〔1979（昭和54）年調査）の整備計画案を同年5月に開催した指導委員会に諮問した。

第8次調査では，僧房が存在したと推定される講堂跡北側の空間地に幅3m×長さ57mの東西トレンチを軸に，南北方向3本のトレンチを設定して発掘調査を実施している。調査結果として僧房に関する遺構はすべて削平されていると報告されていたが，8世紀後半代の遺物を包含する溝や整地土層の存在することが報告されていた。

指導委員会は，このことに注目し再度の発掘調査によって僧房跡遺構の有無を確認したうえで環境整備実施設計を行うことを条件に環境整備計画は了承された。

このことにより実施した発掘調査が筑前国分寺第18次調査である。発掘調査は文化課参事補佐川述昭人が担当し九州歴史資料館調査課がこれを助けた。

第8次調査の結果から地形が東に高く西に低いこと，遺構の密度が東半部に多いことから，筑前国分寺中軸線より東側に力点を置く調査区を設定した。

10月5日にバックフォーにより表土除去作業を開始し，同時に遺構検出にかかった。そして10月16日に写真撮影，21日・22日実測調査を行い，10月26日に発掘作業を終了している。

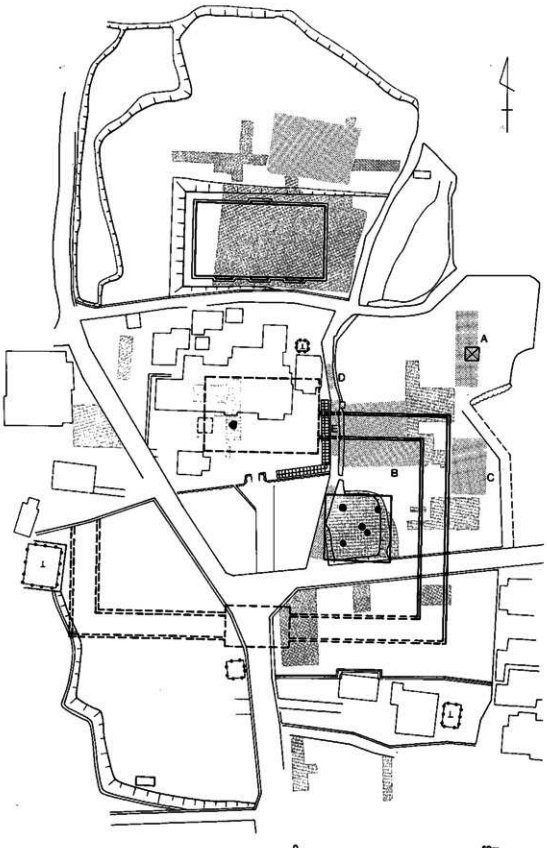
発掘調査終了後，僧房跡に関連する遺構が残っていないことや，小委員会の先生方の日程的な都合から，各委員個別に御来府を仰ぎ現地で御意見を聴した。また実施設計については九州芸術工科大学教授杉本正美氏に指導を仰いだ。

2　平成2年度の調査（第12次調査）

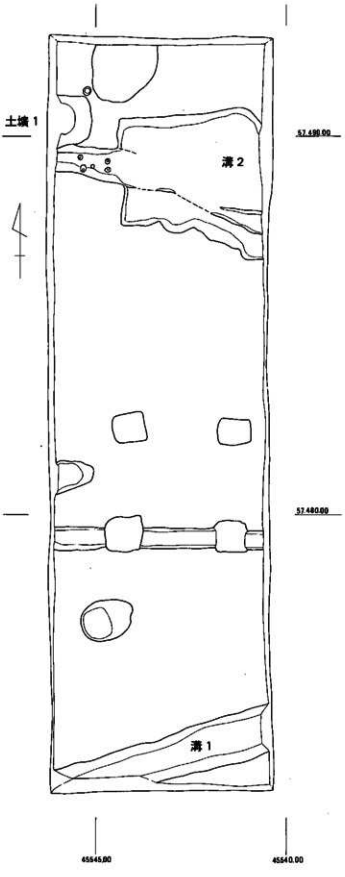
調査目的に沿って付替園路計画地に2ヶ所，北面回廊跡推定地から塔跡へかけて1ヶ所のトレンチを設定した。これを北からA・B・Cトレンチと呼ぶ。

付替園路計画部分の調査（回廊北側・東側の調査）

A・C2本のトレンチがこれにあたる。Aトレンチは幅5m×長さ20mの南北に長いトレンチである。今回の環境整備実施区域ではAトレンチの周囲が最も高く，塔跡にかけて低くなり約2mの高低差となっている。土層の状況は1980（昭和55）年の環境整備実施時点の盛土が約10cmあり，そ



第2図　筑前国分寺跡発掘調査進捗状況図（1／1000）



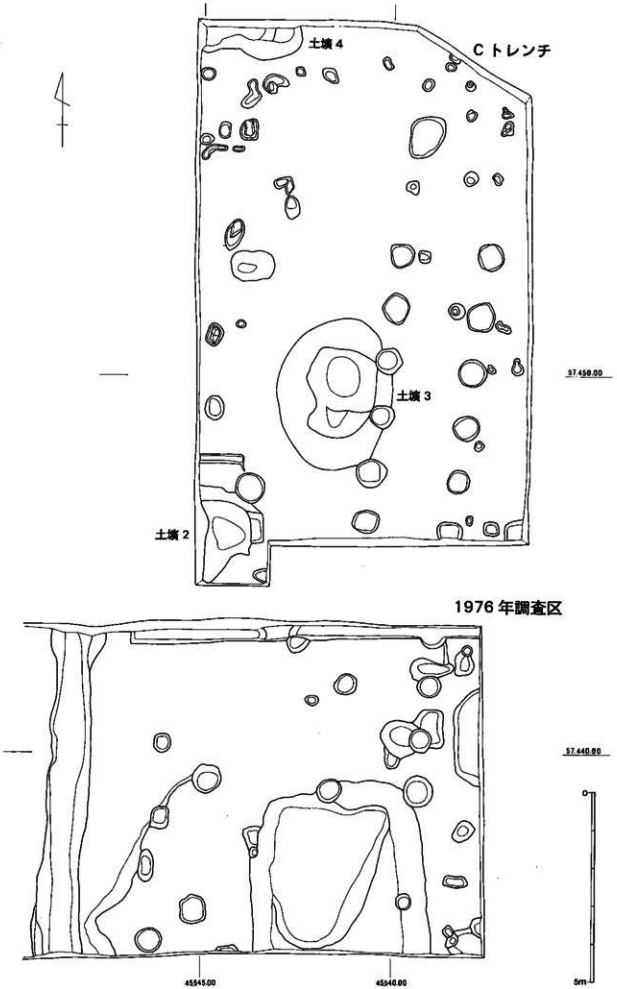
第3図　回廊北側遺構実測図（1／100）

の下が旧表土(茶褐色耕作土)が10cmほどである。耕作土直下が地山となる。遺構は地山上で検出されている。トレンチ北側で溝2が土壙1に切られた状況で検出されている。溝2は東西の溝状遺構で20cmほどの深さをもつ。瓦片の出土があった。土壙1は深さ70cmの穴で土師器や瓦片の出土があった。トレンチ南端で検出された溝1は深さ80～95cmほどの深さの斜めの溝で第6次回廊跡調査トレンチの北辺の溝に続き，その西側ではBトレンチ北東隅から北に曲がっている。近世の陶器片が溝中から出土している。旧地境の溝であろう。

トレンチ中央の4つの穴は四阿屋の基礎である。

Cトレンチを東面回廊の東側に南北に長い幅9m×長さ13.5mの範囲に設定した。土層の状況はAトレンチと同様であるが，環境整備による盛土および茶褐色耕作土ともに25cmほどの厚さがあった。遺構は拳大から人頭大の礫が全面にまじる地山面で検出されたが数は多くない。その1つはトレンチ南西隅の土壙4で鴻臚館Ⅱ式軒丸瓦6点・同軒平瓦2点・平瓦凸面に「七十八板」とヘラ書きしたもの・土師器片などが出土した。土壙の形状は不整形である。深さ50cmほどで埋土も一層であった。

トレンチ東寄りでやや斜めに走る2列の穴およびトレンチ西寄りの斜め南北方向の3つの穴は葡萄棚の支柱を建てた穴である。この中央の穴列と重なって土壙3が検出されている。土壙3は東西3m×南北4m・深さ40cmほどの土壙である。瓦片・須恵器片が出



第4図　回廊東側遺構実測図（1／100）

土している。トレンチ西北隅で深さ30cmほどの不整形の土壙4の南半部を調査したが，出土遺物は瓦片だけであった。

北面回廊跡の調査

回廊跡未発掘部分（北面回廊跡）の調査のため，1977（昭和52）年の回廊東北隅調査区と一部重複させ，その西側にトレンチを設定した。Bトレンチである。Bトレンチの規模は南北19.5m×東西14.5mである。

1977（昭和52）年の回廊跡の調査では塔跡の中心から東22.8mで検出された南北溝と北30mで検出した東西溝が連結する部分を調査し，これを回廊跡外側の雨落溝と認定した。また，このトレンチ西南部では回廊入隅と想定される地山の落ちと溝状遺構を調査し，回廊の基壇幅を6mと認定している。

Bトレンチでは回廊跡の隅から西に続く地山の段落ちおよび回廊北側雨落溝の検出に努めた。

調査では塔跡から北へ30mの地点で溝2が検出された。溝2は幅70cm，深さ20cmほどの東西溝が長さ5mほど検出された。埋土は茶褐色土で上面はすでに削平されていて，遺構をおおうような包含層はなかった。この溝は1977年調査の回廊跡北側雨落溝の西側連続部分である。

回廊基壇はその基底部を回廊北側の雨落溝の肩から約1m幅残している程度の状況であった。

回廊跡東北入隅からの地山の落ちはすでに南側が水田化された時に地下げされて消失していた。

Bトレンチでは，その東北隅でAトレンチで調査された溝1が北に曲がり，回廊跡推定部分西側では開田による地下げの痕と想定される落込があった。

北面回廊跡推定地の南側は，開田時の地下げにより回廊基壇残存部とは高低差にして65cmほどの段差となっていた。

Bトレンチ内では，この段落がトレンチ東隅で南に曲がり，トレンチ南端まで続く。

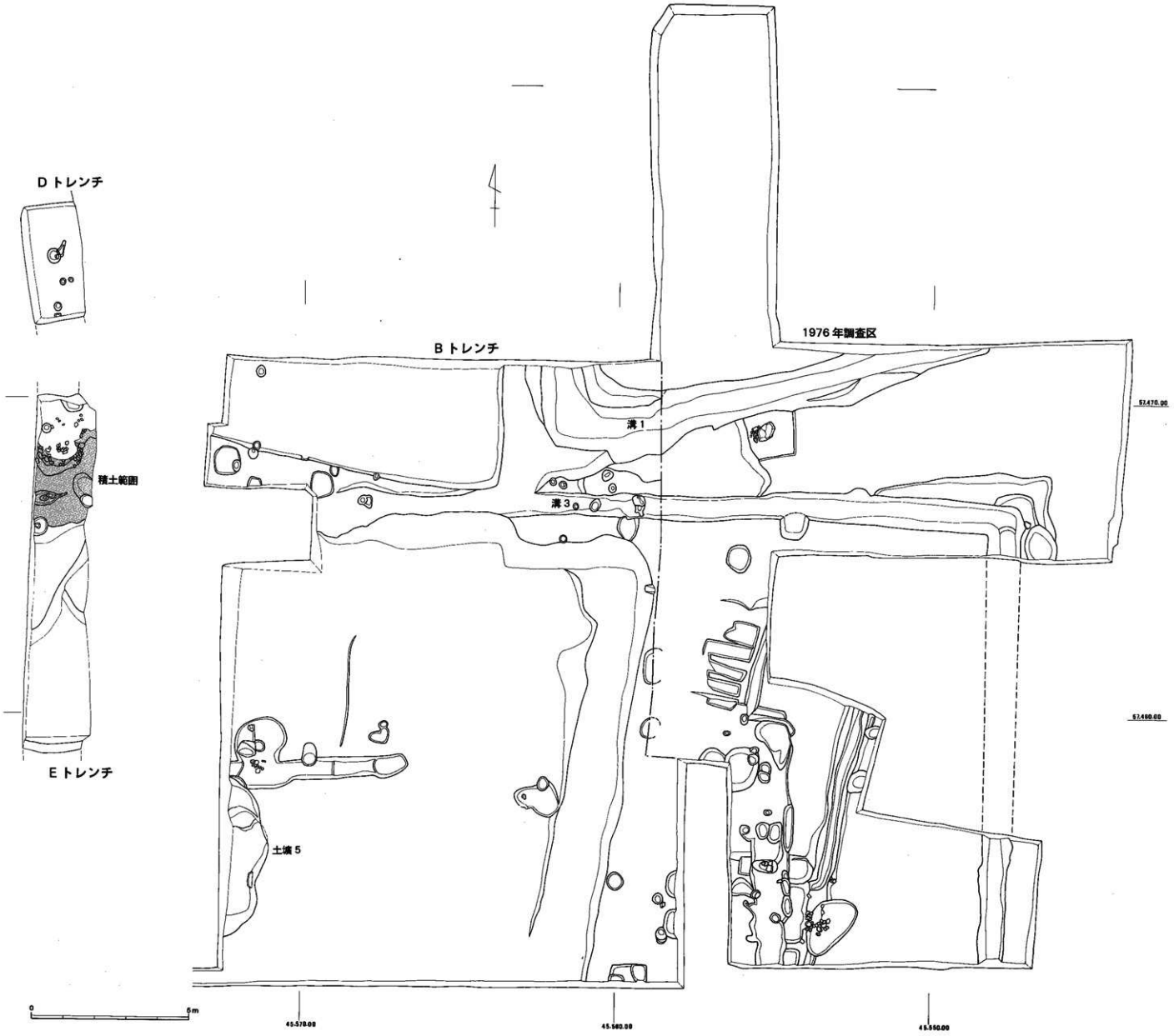
北面回廊跡南側は，この地下げによって回廊や塔が存在した当時以降の遺構の多くが消失したものと思われる。なお，上部が削平されながらも底の部分のみが残っていた土壙のいくつかが検出されている。

旧園路部分の調査

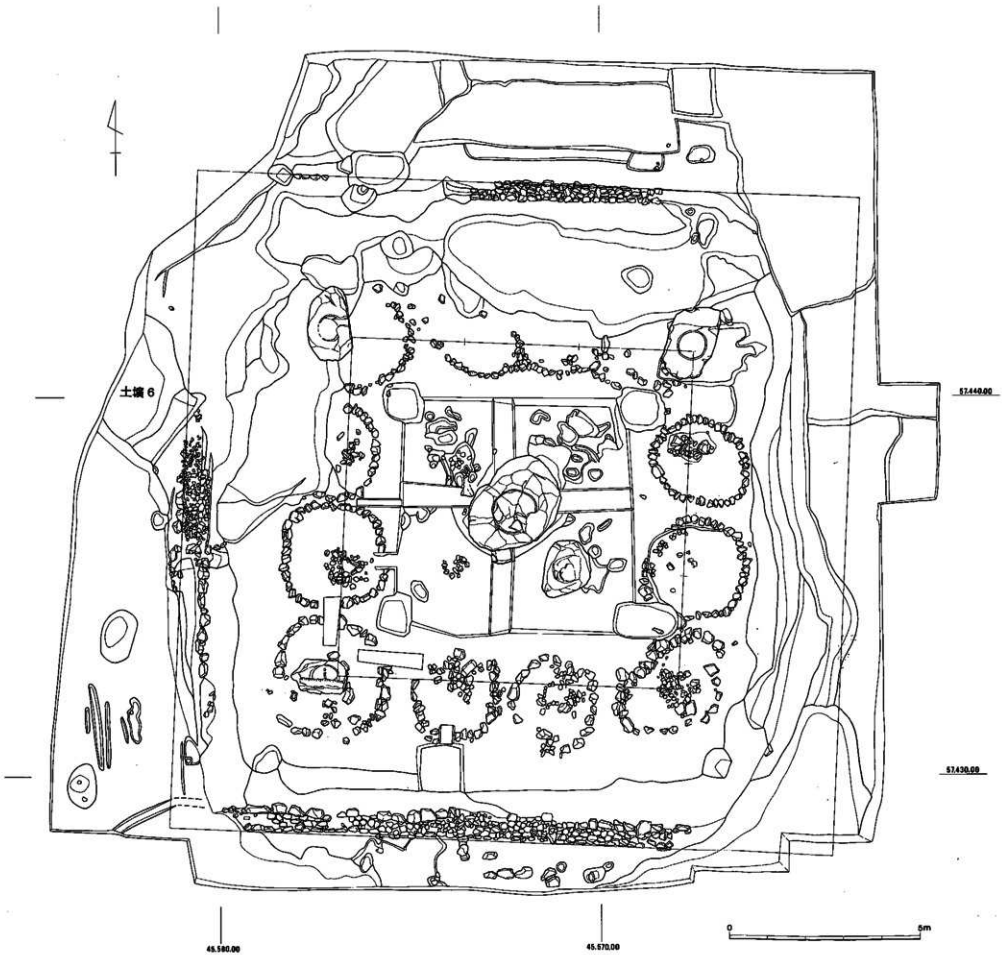
環境整備工事と併行して旧園路部分に3ヶ所のトレンチを設定した。北面回廊推定部分に設定したものを北からD・Eトレンチ，塔跡西側に設定したものを塔跡西側拡張区とよぶ。D・Eトレンチの東側は水路となっていて，この部分の遺構は消失している。

Dトレンチは回廊推定部分より北にはずれた部分に設定した。幅1.5m×長さ3.5mの南北に長いトレンチである。園路のアスファルト5cm，園路用盛土25cmを除いた下は，30～40cm程の瓦片包含層である。その下が地山面となる。地山の高さはBトレンチ回廊跡基壇残高とほぼ同じ高さであった。小さいピットが地山上で検出された。

Eトレンチは，Dトレンチの南2mほどで，幅1.5m×長さ11mのトレンチである。トレンチの南端から2mほどから北端へ6mの範囲が回廊跡想定部分にあたる。調査結果では，トレンチ南端から3m付近から地山が高くなりトレンチ北端1m付近で落込むまで続く。この部分の高さはBトンネル回廊基壇部分よりやや低い。注目されたのは，北面回廊跡北側雨落溝推定部分から北側の落込みにかけて2枚ほどの積土が認められたことである。また，トレンチの北端近くでは礎石据付痕跡を思わせる小礫が円形に近い堀込みに貼り付けたような状況で発見されている。



第5図　回廊東北隅遺構実測図（1／100）



第6図　塔跡遺構実測図（1／100）

積土が回廊基壇の一部である可能性を考えれば，回廊北側の雨落溝がこの部分で検出されていても良いように思われる。また金堂基壇の一部に考えるとすれば，基壇化粧がトレンチ内で見つかっても良いように思う。しかし，金堂跡については基壇の西端・南端を1974（昭和49）年に調査出来ている。伽藍中軸線と金堂跡基壇西端の関係から考えて，この部分の積土は金堂跡基壇の外側と判断すべきであろう。現状では明確にしがたいが，回廊基壇を金堂基壇にとりつけるにあたって回廊基壇を西に高くする必要を考えた。この為の積土と想定して置きたい。

塔跡の西側拡張区は塔基壇西側の旧園路部分である。このトレンチでは塔跡基壇西北隅の検出を目的とした。

結果として塔跡基壇西北隅部分では遺構は残っていなかった。

この部分では，ヒューム管の埋設のためモチノ木の抜根をしたが，塔跡西側の基壇西側から西北のモチノ木の根の下にかけて土壙6があり，軒瓦などがまとまって出土している。

3　平成4年度の調査（第18次調査）

講堂跡基壇の北辺から約6ｍほど北で，筑前国分寺中軸線の東側に第18次発掘調査区を設定した。第8次調査の結果として東半部に遺構が密集すること。そのトレンチ調査では地山検出高が西側では東側より1ｍ以上低くなっていたためである。

東西22ｍ×南北17ｍの範囲を発掘した。発掘区には，40～60㎝ほどの厚さで整備時点での盛土があった。盛土の下は，土層観察では薄い整地土が残る部分と直接地山となる部分とがあった。第8次調査部分は地山まで下げられていることから地山面での遺構検出作業となった。

検出した主な遺構では東北隅で円形周溝墓を思わせる遺構がある。周溝の中からは中世の土器が出土している。

また，中軸線から東へ約8ｍ，講堂跡基壇北辺から8ｍの場所でやや伽藍中軸線より東にふった柵列状遺構2の柱穴8間分が検出されている。また，この柵列状遺構に平行に東に2.4ｍ離れて柵列状遺構1が検出されている。この二本の柵列状遺構の時期は明確ではないが，方位が伽藍中軸線と異なることや柱穴の間隔も一定していないことから筑前国分寺に関係する遺構とは考えにくい。

また，柵列状遺構1の東で拳大の石を集めた土壙状の遺構が溝1を切って掘られていた。礎石堀方の根固め石とは異なるものである。

この他に，小さな穴・大小様々な土壙多数が調査されている。

調査結果は以上の通りで第8次調査以上の調査成果はあげられていない。

僧房跡はこの部分に存在しなかったか，または講堂跡基壇とのレベル差が30㎝ほどあることから削平されたものと考えた。

4　出土遺物

（1）　塔跡・回廊跡・僧房跡出土土器（第8図・図版11）

土器類には土師器，黒色土器，須恵器，須恵質土器，土師質土器，それに陶磁器がある。これらは大部分が小破片であるため図化出来るものは少ない。

塔跡出土土器

土師器

杯（1）　復元口径12cm，高さ7cmのものでは底部はヘラ切り離しで，全体はヨコナデで調整している。口縁部から内面の体部および底部には油煙の付着がみられ，灯火器として使用されている。昭和51年度の塔跡調査によって土壙1・2から杯，椀等が出土しているが，この杯もそれに類するとみてよい。出土位置からみても一連のものと考えられる。土壙1・2は塔の終焉の時期を示すものとされており，その年代を10世紀中葉としている。

付替園路出土土器

須恵器

蓋（2）　小破片であるが復元口径14cm前後，外面天井部はヘラ切り未調整，内面の口縁部と体部との境は余り明瞭ではない。土壙3上層出土。

杯（3）　復元口径13.4cm，器高3.9cm。全体はヨコナデ調整で，断面四角の低い高台を貼付する。土壙2出土。

土師器

杯（4）　復元口径13.3cm，器高3.0cm。全体に摩滅して調整は不明瞭である。底部の切り離しは摩滅の為不明であるが糸切りとみられる。板状圧痕が強い。土壙1出土。

椀（6～9）　いずれも椀の高台部片である。6・7はやや小形のもので体部の立ち上がりが底部端近くから始まる。9は高い高台で外開きの直線的な高台を有する。体部は底部端から立ち上がり，直線的な体部となっている。9世紀代の特徴をもつ。

甕（10・11）いずれも小形の甕である。10は復元口径13cmで，「く」字状に外反させた口縁部の内面はヨコ方向のハケ目，ほぼ直線的な体部は外面をタテ方向のハケ目調整，内面は斜め上方のケズリを施す。外面には煤が付着している。黄褐色土層出土。11は復元口径19cmで10と同様に口縁部内面をヨコ方向，体部外面にタテ方向のハケ目を施し，体部内面はヘラケズリ調整する。土壙2出土。

黒色土器

椀（5）　内外面を黒色に燻す椀である。内面のミガキについては摩滅が著しいため不明である。

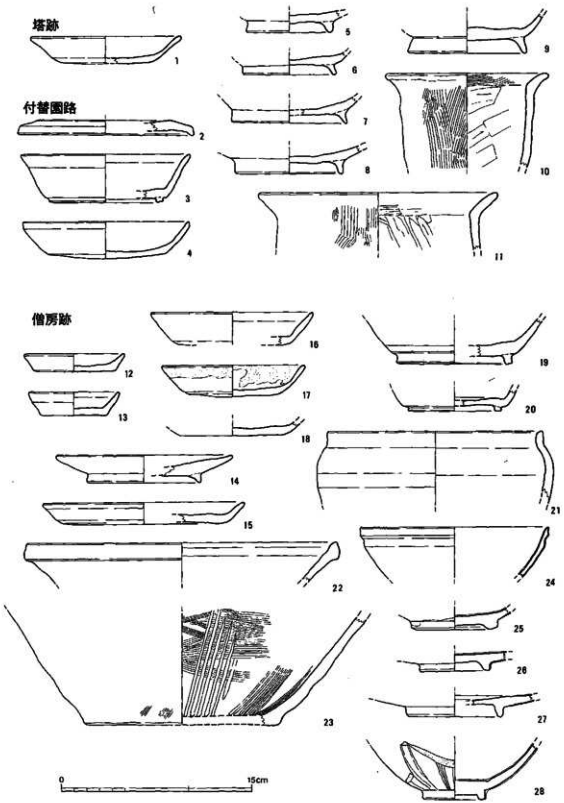
僧房跡出土土器

土師器

小皿（12・13）12は口径8.0cm，器高1.4cm，底径6.5cm。13は口径7.2cm，器高1.9cm，底径5.4cmである。いずれも底部の切り離しは糸切りである。S－35出土。

皿（14・15）14は高台を貼付する皿である。復元口径は14.0cm，器高2.3cm。体部と口縁部は立ち上がらず，ほぼ平坦になる。10世紀中頃～後半代。瓦層出土。15は復元口径16.0cm，器高1.7cm。摩滅して調整は不明瞭であるが，外底および体部の下位はヘラケズリ調整する。胎土には若干の細

第7図　僧坊跡推定地遺構実測図（1／100）



第８図　出土土器実測図（１／３）

砂粒を含む。8世紀後半代。S－7出土。

杯（16～18）16は復元口径13.0cm前後。全体に摩滅が著しく調整は不明であるが，底部はヘラ切り離し。17は復元口径13.0cm，器高3.0cm。底部の切り離しはヘラ切り。口縁部および体部に媒が付着する。瓦層出土。18は橙茶色を呈する杯の底部片で，底部と体部下位はヘラケズリ調整する。S－7出土。8世紀後半代。

椀（19）断面四角形の高台を貼付し，体部の下位をヘラケズリ調整する。9世紀前半代。褐色土層出土。

須恵器

杯（20）やや小形の杯の小片である。断面四角形の低い高台を底部端に貼付する。S－137出土。

壺（21）復元口径17.0cm前後の短頸壺である。体部上位に最大径を有するが，肩の張りは少なくなだらかになる。短い口頸部はほぼ直上に引き上げられ，端部は丸くする。褐色土層出土。

須恵質土器

鉢（22）22は灰色を呈する粗い胎土のいわゆる東播系鉢の口縁部片である。復元口径24cm前後。S－135出土。

土師質土器

鉢（23）白色味の強い淡茶色を呈する摺鉢である。6本単位の下し目を入れる。内面の体部にはヨコ方向の細かいハケ目調整をし，凹凸の外面はナデの後，部分的にハケ目が残る。M－2出土。

陶磁器

白磁

椀（24・25）24は口縁部を強くヨコナデすることによって玉縁状に肥厚させる椀である。復元口径15.0cm。胎土は黄白色のやや粗いもので黒い粒子が混じる。釉は透性のある黄白色釉を薄めに施す。S－20出土。25は口縁部を玉縁にする椀Ⅳ類の高台部片である。

青磁

椀（27・28）竜泉窯系青磁の椀である。27は高く削り出した高台で，内面の見込みを輪状に釉カキ取りするのを特徴とする。淡緑色の釉は発色が悪く風化している。S－20出土。28は鎬蓮弁の椀である。M－1上層出土。

朝鮮製陶磁器

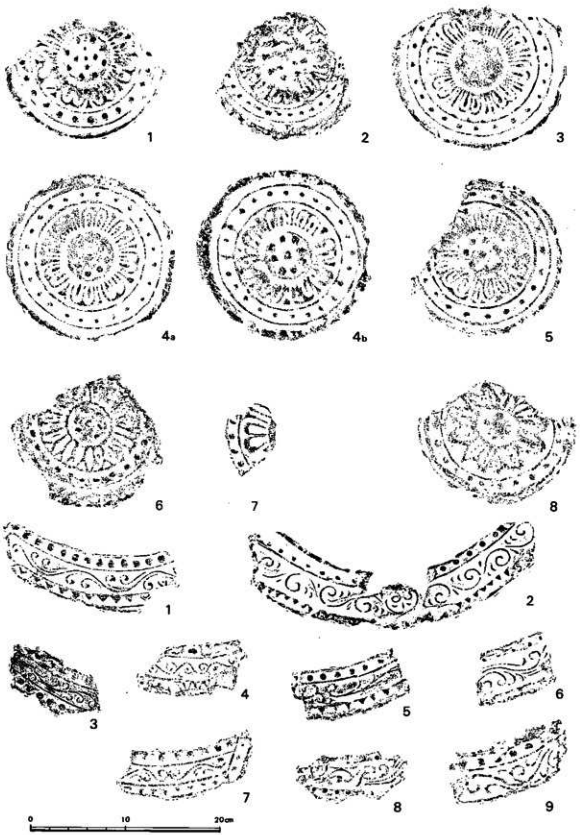
椀（26）李朝青磁の椀の底部片である。釉は発色が悪く風化し全体に白っぽい。見込には三条の圏線と円文の白象眼を施しているが不鮮明である。S－124出土。

（2）瓦類

瓦類では，軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・塼・丸瓦・平瓦類が出土している。これら瓦類の大半は攪乱層のなかからの出土であるが，遺構に伴って出土したものも若干ある。

塔跡・回廊跡周辺のものがほとんどで僧房跡推定地では，第9図軒平瓦2および不明軒平瓦1点が出土した。

軒丸瓦（第9図，図版12）　8種39点が出土している。筑前国分寺出土軒丸瓦としては2種を除けば報告例のあるものばかりである。



第9図　出土軒瓦拓影図（1／4）

1は鴻臚館Ⅰ式と呼ばれている軒丸瓦である。5点出土した。2は1に文様構成や大きさも類似する軒丸瓦である。1との相異は珠文が小さく密に配置されている。木製笵型の傷が残る。1点出土し新出資料と思われる。3も鴻臚館Ⅰ式に類似するが，瓦当径が大きい。文様構成上では，複弁蓮華文の間弁の表現が2枚の子葉のように表現されていること，および弁区と外区珠文帯との間の界線が弁区側で蓮弁・間弁の凹凸に沿って突起で表現されている点である。2点出土で新出資料である。

4は鴻臚館Ⅱ式の軒丸瓦で23点（59パーセント）と最も出土量が多かった。この軒丸瓦は複弁八弁蓮華文の弁の1つが単弁に表現される特徴がある。瓦当製作時の笵の傷が目立つものがあったことから，傷のないもの（a）・傷のあるもの（b）と2種類を図示した。今回の出土例ではa17点・b4点ほどで笵傷のあるものは少ない。傷痕から木製笵型と判断されよう。

5は複弁六弁蓮華文軒丸瓦である。間弁が複弁を包み込むように表現されるが，分割が正確でないため間弁が蓮弁と同じように表現されている部分がある。瓦当の彫は偏平で浅い。1点出土。

6は細単弁＝一弁蓮華文の軒丸瓦である。1978年度概報では比較的出土例の多い軒丸瓦の1つとして報告されている。2点出土していて，うち1点には笵傷が残る。

なお，6は製作使用された時期を共伴土器から同概報は8世紀末～9世紀初頭に推定している。

7は複弁六弁蓮華文軒丸瓦である。平瓦凸面の叩打具の代用にこの瓦当笵が打ちつけられたものがあり，筑前国分寺出土尊勝寺系軒平瓦の笵型が平瓦に叩打具として用いられた資料とSK057で共伴していると報告されている。このことからこの軒丸瓦は，尊勝寺系軒平瓦とセットとなる可能性が指摘されている。（石松好雄「筑前国分寺軒丸瓦考」『論苑考古学』 天山舎　1993）

8は単弁一二弁蓮華文軒丸瓦である。1点出土。

軒平瓦（第9図，図版11・12）　11種33点が出土している。

1はⅠ式軒平瓦で5点（18パーセント）が出土している。本来は観世音寺創建時の軒瓦である。今回の出土瓦例では，観世音寺では平瓦凸面が格子目の叩打痕を残しているのに対し，縄目叩打痕を残しているもの1点があり，格子目の叩打痕を残しているものは1点もないこと，瓦当向かって右端に瓦当笵が割れた傷を残しているもの1点がある。老司Ⅰ式軒平瓦でこの部分に笵傷のあるものは，現在まで筑前国分寺に限られているようである。また確定は出来ないものの，粘土板樋巻き作りによって作られた可能性がある。

2は鴻臚館Ⅱ式の軒平瓦で15点（42パーセント）出土している。この軒平瓦の特徴は平瓦部にある。平瓦凸面では叩打痕はすべて縄目叩打痕である。凹面では模骨痕が荒く残り，布の継ぎ目のあるもの粘土の合せ目と思われる痕跡を残すものなどがある。

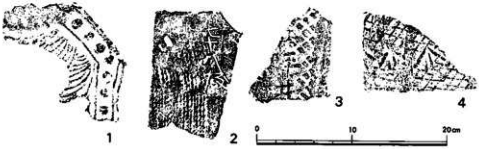
3は軒丸瓦6とセットと考えられるもので今回は3点出土している。段顎で縄目叩打痕を残している。観世音寺・政庁跡からも出土例はあるが筑前国分寺に多い軒平瓦である。

4は曲線顎の軒平瓦で上帯の珠文はやや偏平である。下帯は線鋸歯文である。1点出土。

5は均整唐草文の中心飾と右半の文様を残す。深い段顎の瓦である。観世音寺に少量の出土例がある。2点出土。

6は彫りの深い瓦当文様に「包み込み技法」によって平瓦を接合している。瓦当文様の下外区は珠文帯である。観世音寺等で少量出土の例がある。1点出土。

7は老司系の瓦当文様の軒平瓦であるが，平瓦は「包み込み技法」で接合されている。浅い段顎



第10図　出土瓦類拓影図（1／4）

で瓦当端部は丸味をおびる。1点出土。

8は唐草文の瓦当文様で上・下外区とも珠文が配置されている。平瓦のとりつけ方，瓦当端部の形状とも7に類似する浅い段顎の軒平瓦である。1点出土。

9は出土量は多くはないが，筑前国分寺では塔跡・回廊跡・講堂跡などから出土している。平瓦のとりつけ方，瓦当端部の形状は8に類する。平瓦部は斜格子目を残している。

この他に軒平瓦では，鴻臚館Ⅰ式軒平瓦と判定できるもの1点，1978年概報の第20図8と判定できるもの1点が出土している。

鬼瓦（第10図，図版12）　鬼瓦片1点が塔西北隅土壙から出土した。小形で，外区珠文帯部分の厚さが3.4cmと薄手である。

文字瓦（第10図2～4，図版12）　2は平瓦凸面に「七十八板」とヘラ書きされている。「七十八枚」のことか。縄目叩打痕をすり消してヘラ書している。凹面には模骨痕を残している。鴻臚館Ⅱ式軒瓦と共伴している。3は「平井」である。図は平瓦片であるが他に丸瓦片1点，平瓦片1点同笵のものがある。4は「介」である。同笵の丸瓦3点が出土している。

図　版

筑前国分寺全景（発掘調査前・南西から）

図版 2

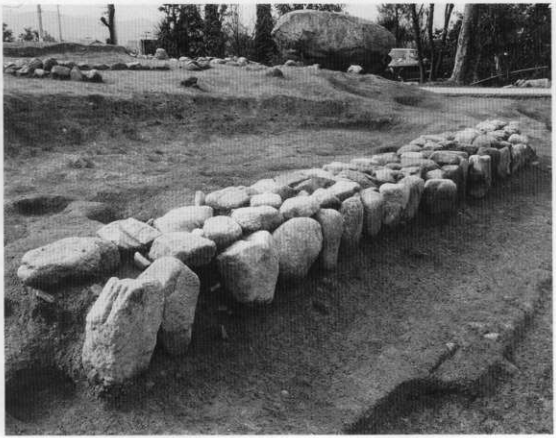
(1)　筑前国分寺塔跡全景（南から）

(2)　筑前国分寺塔跡西側発掘調査状況（南から）

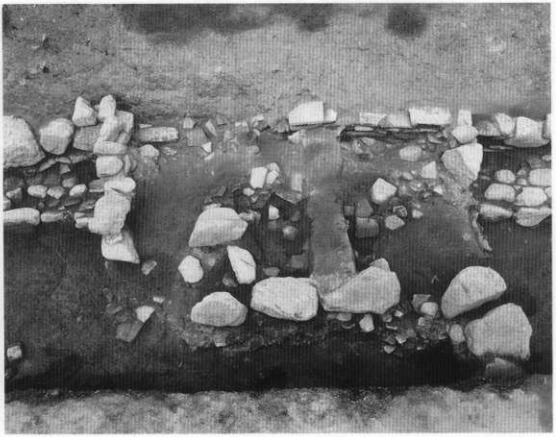
(1)　塔跡基壇南辺石積み状態

(2)　塔跡基壇南辺瓦積み状態

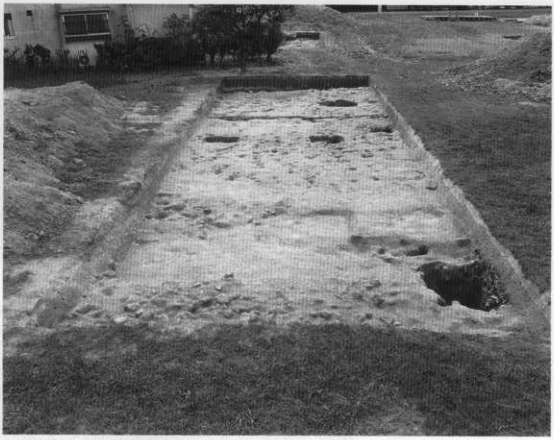
図版 4



(1)　塔跡基壇北辺石積み状態

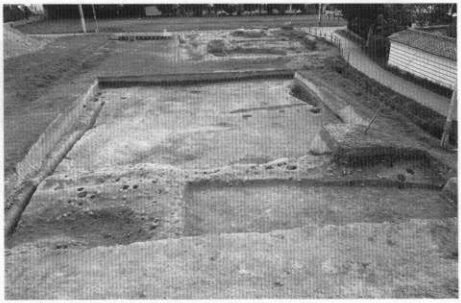


(2)　塔跡基壇南辺石組み階段出土状態

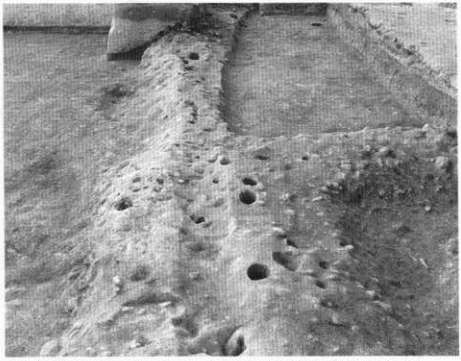


(1) 筑前国分寺第12次調査Aトレンチ全景（北から）

(2) 筑前国分寺第12次調査Aトレンチ溝１（西から）



(1) 筑前国分寺第12次調査Bトレンチ全景（北から）



(2) 筑前国分寺第12次調査Bトレンチ北面回廊跡北側雨落溝（東から）

(3) 筑前国分寺第12次調査Bトレンチ土壙５（東から）

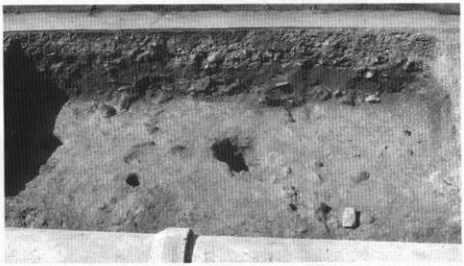
筑前国分寺第12次調査Cトレンチ全景（南から）

筑前国分寺第12次調査Cトレンチ土壙２（北から）

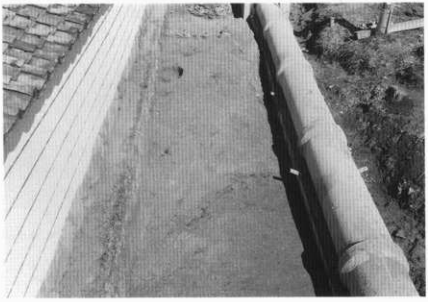
図版 8

(1) 筑前国分寺第12次調査・旧園路部分発掘調査状況（南から）

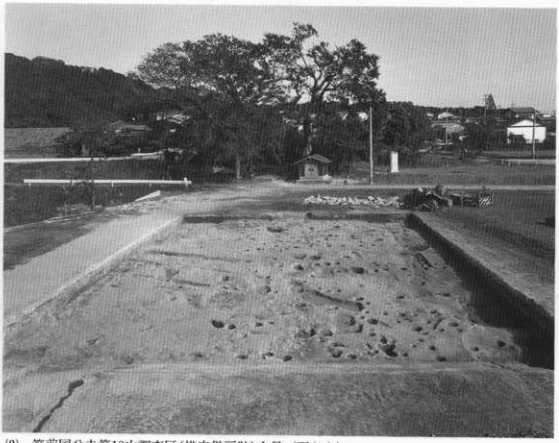
(2) 筑前国分寺第12次調査 Dトレンチ（東から）



(3) 筑前国分寺第12次調査 Fトレンチ（南から）

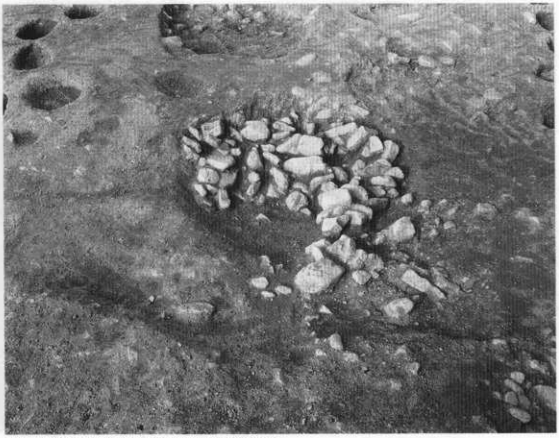


(1)　筑前国分寺第18次調査区(推定僧房跡)全景（北から）

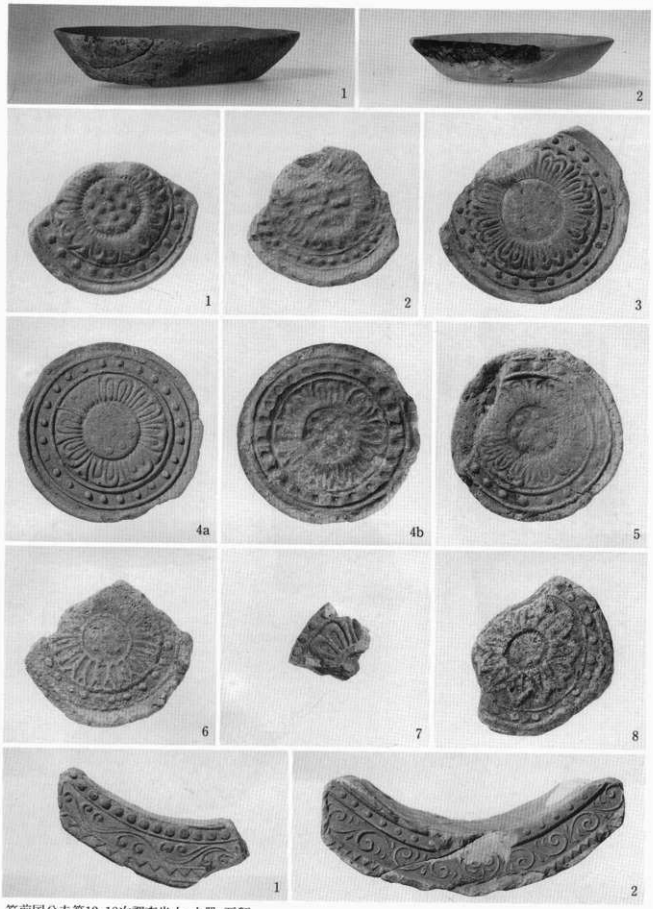


(2)　筑前国分寺第18次調査区(推定僧房跡)全景（西から）

(1) 筑前国分寺第18次調査柵列１・２（南から）

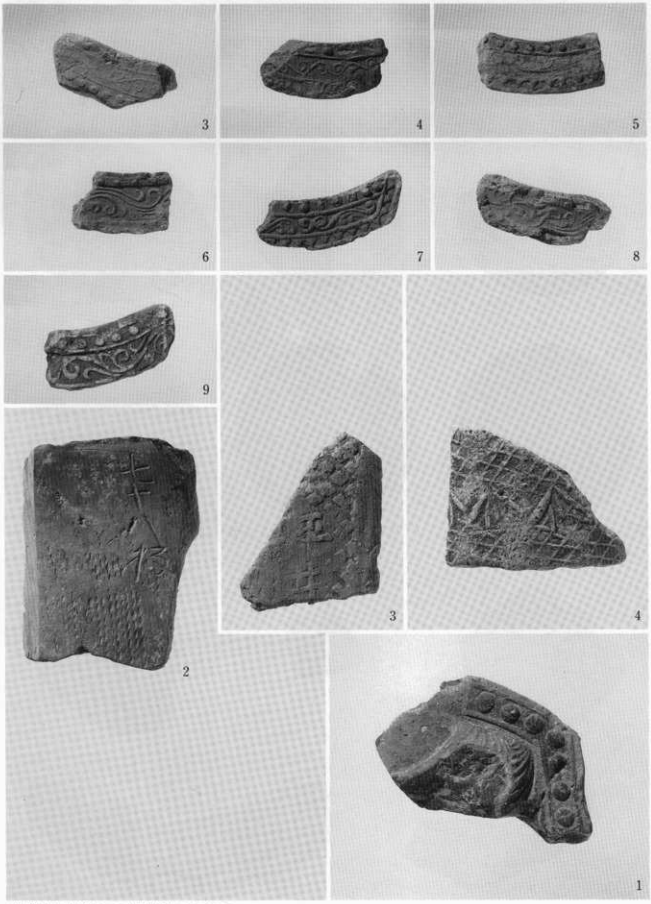


(2) 筑前国分寺第18次調査集石土壙（南から）



筑前国分寺第12・18次調査出土 土器・瓦類

図版12



筑前国分寺第12・18次調査出土 瓦類

Ⅳ　環境整備事業概要

1　はじめに

大宰府周辺の4市1町には，特別史跡大宰府跡を中心として，東には，史跡学校院跡及び観世音寺子院跡があり，西には，史跡筑前国分寺跡及び特別史跡水城跡等，北側の四王寺山には史跡大野城跡がある。また南側の背振山麓には基肄城跡が所在している。

これらの史跡の保存と活用を図るため，昭和48年6月に大宰府歴史公園整備・前期及び後期5ヶ年計画が立案され，これに従って遺構の学術的調査とその成果に基づいた遺構の平面復原及び修景事業が着手された。

当該国分寺跡については，前期5ヶ年計画に従って，昭和50年度から環境整備事業が始まっており，55年度までの事業内容については既に報告済み[註1]であるので割愛し，ここでは平成2年度から4年度までの3ヶ年計画で実施した内容について報告する。

なお，筑前国分寺跡の環境整備事業は次の基本的な考え方に基づいて実施した。

基本計画の考え方と方法

国指定史跡筑前国分寺跡の保存と活用の効果をあげるため，地下遺構は基本的には覆土保存し，その覆土保存された遺構上に往時の姿をしのぶことが出来るような復原的施設整備を行い，これらの名称，内容などの解説を加えて全体として野外博物館的に整備することにし，外周等についても往時の環境や景観がしのばれるような整備をおこなうことが望ましい。

① 周辺景観の整備

国分寺の立地環境を示す周辺景観は基本的には見せる。しかしながら，歴史的環境を理解するうえで障害となる景観はできるだけ隠す。

特に，今ある国分寺の建物群は史跡内にはあるが，全く別のものであることを利用者に理解させる。

② 史跡の整備

調査によって確認された地下遺構は，自然や人為的活動および整備工事などによって破壊されぬように現地面に覆土盛土を行って保存する。また，復原整備および復原的整備は資料の確かなものによる復原はできるだけ往時の姿に近づけて表現する。

また，史跡利用者のための便益，休息，修景等の整備を行い，史跡環境および利用環境の向上をはかるために公園的整備を行う。さらに，社会的ニーズに応えて史跡およびその周辺の環境整備について配慮することが必要であるとし，郷土の歴史的シンボルとして理解し，歴史・社会教育の場として貢献することが必要である。

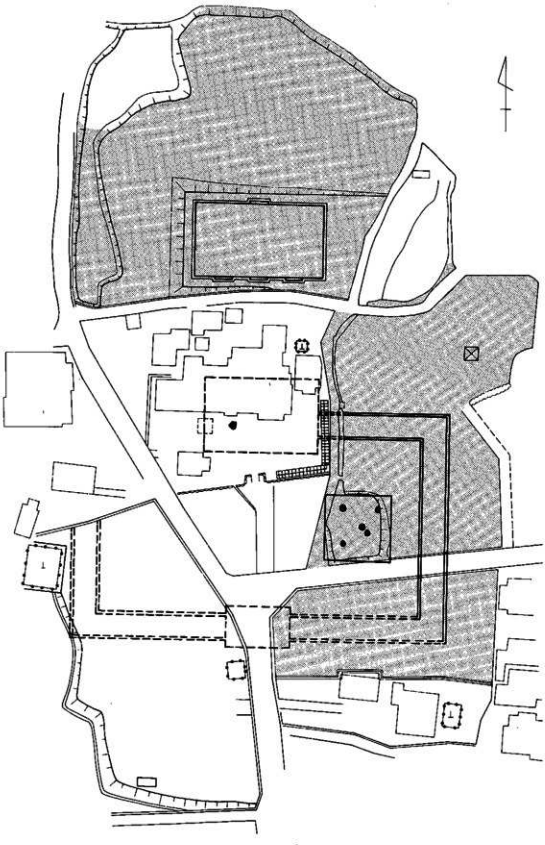
③ 誘導計画

全体の空間構成を容易に理解できるようにし，目的とする展示施設へのアプローチを容易にする。また，歩く道すがら目に入る施設の特性をよく知ることが出来るようにする。さらに，身体障害者やその他の弱者が利用できるような配慮が必要である。

註1　福岡県教育委員会『史跡筑前国分寺跡および国分瓦窯跡』――環境整備事業実施報告書――1980

第1表　筑前国分寺跡年度別環境整備一覧

年　度	内　　容
昭和50	航空写真図化委託事業 境界標設置 発掘調査（回廊跡）
51	回廊跡平面復原工事（東南隅） 発掘調査（回廊跡及び塔跡） 発掘調査報告書
52	回廊跡復原及び周辺整備工事 発掘調査（回廊跡及び講堂跡，寺域南限，寺域東限） 発掘調査報告書
53	講堂跡瓦積基壇及び回廊跡の一部平面復原工事 説明板設置及び図板の取り替え工事
54	講堂跡瓦積基壇復原工事（継続事業） 瓦窯跡整備工事 説明板設置工事
55	回廊跡及び周辺整備（市道南側） 発掘調査（講堂北側の僧房跡）
平成2	塔跡瓦積基壇修復工事，塔跡整備 園路工事 水路改修工事
3	回廊跡の整備工事 塔跡周囲の整備工事 園路周りの植栽工事
4	講堂跡北側の造成工事 講堂跡瓦積基壇北側階段修理及び礎石一部復原工事 講堂跡周辺の植栽工事 発掘調査（講堂跡東北部の僧房跡推定地）



第11図　筑前国分寺跡整備範囲図（1／1000）

2　平成２年度の整備事業（第12～14図，図版13～20）

平成２年度の整備にあたっては，施工方法の検討，使用材料の選別，遺構基壇と復原基壇を勘案し塔跡の復原に着手した。

目的は文化財保護の理念はもとより，その保存と活用により実をあげるとともに，地域社会においては歴史的遺産，街づくりにおいては古代空間の役割を果たすものである。

施行方法の検討

遺構基壇と復原基壇との関係は調査結果に基ずき，復原規模を18.0×18.0mとし，地下遺構を傷めないために砂で覆土し保存に努めた。

礎石は，17個のうち13個を補充した。

使用材料

基壇使用材料決定については，昭和53～54年度講堂跡の基壇整備で使用した瓦は焼き不足から冬の寒気にあうと剝離したり割れたりした。その反省から焼きのよい三州瓦（33×30cm）を用いた。

基壇基礎

下成基壇・上成基壇の基礎はコンクリート基礎とし，鉄筋を配筋した。

(1)　遺構復原工事

1）　基壇

発掘調査の結果に基づき瓦積基壇とする。

下成基壇の石積復原寸法18.0×18.0m，奥行0.45m，上成基壇の石積復原寸法17.10×17.10m，奥行0.20mとした。

石積は下成基壇については平均0.03m，上成基壇では平均0.20mほどの自然石を用い，石積表面にモルタルで見えないように深目地とした。

瓦積の法勾配は１分（１：0.1）勾配とした。目地の幅は平均２cmとしたが，瓦の長手と小口および裏と表が入り交じる積み方であるため目地線はとおらない。目地材はモルタルに着色剤を混入して，漆喰風の色合に仕上げた。

また，裏込めに割栗石とモルタルを交互に重ねながら積み上げ瓦積みを補強した。さらに瓦積４段ごとに瓦の目穴に銅線を通し，その先端に瓦の小片を結束し，裏込め材の中に埋め込んだ。

基壇内の盛土は，瓦積を30cm位積み上げモルタルがある程度乾くのを待って良質のマサ土で盛り土し転圧する，この繰り返しで仕上げていった。

2）　塔跡階段

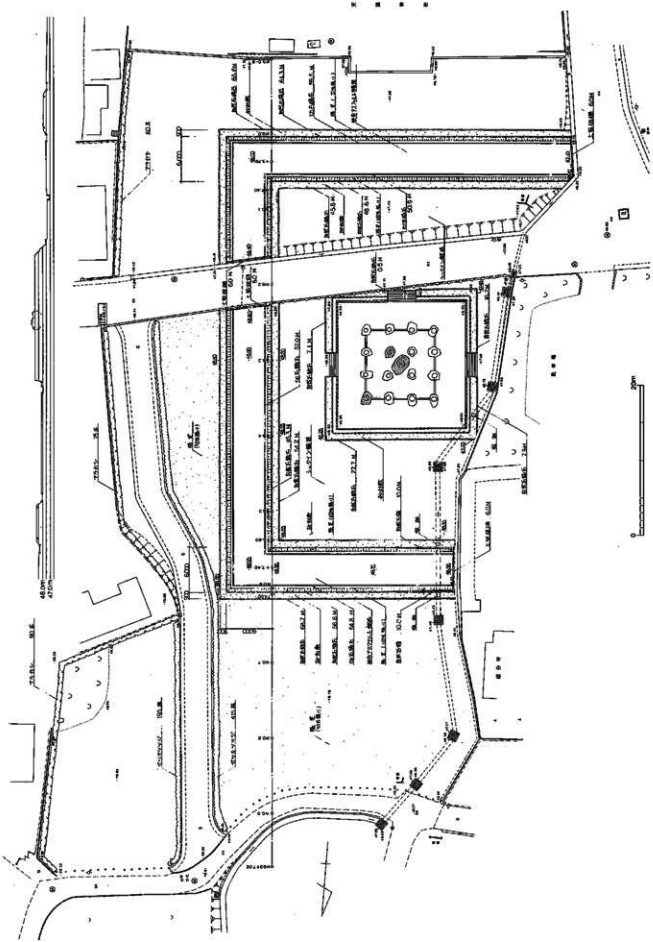
東西階段幅３m，南側階段幅3.80m，踏面0.25m，蹴上0.20mとして瓦積基壇の積み方と同様の手法をとった。

3）　塔跡基壇上部地表面表示

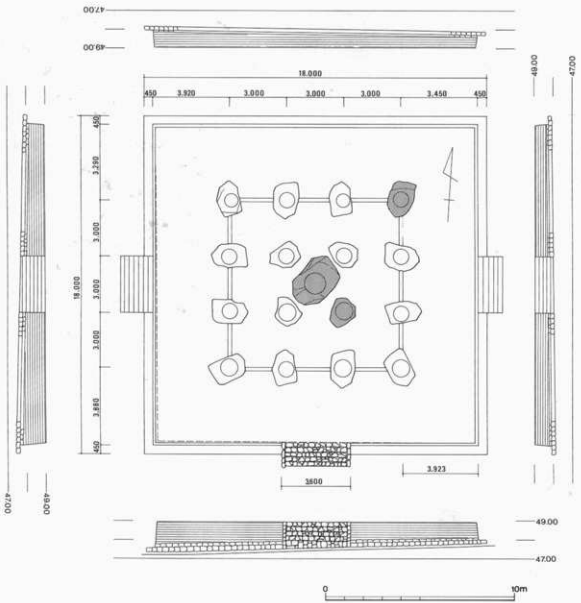
基壇面舗装は塔の内陣，外陣の区別が分かるように御影石の縁石で区切り，Ｆｅ石灰混合を転圧し仕上げた。

(2)　園路整備工事

塔跡の基壇西北隅が道路敷きに入るため全面復原するためには園路の付け替えが必要となり，地元関係者との協議の結果，東面回廊の東側に幅４mの園路を新設した。



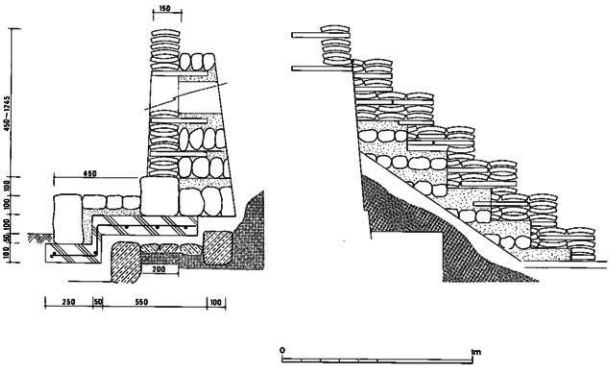
第12図　塔・回廊跡整備計画図（1／400）



瓦積階段

塔跡全景

第13図　塔跡整備計画図（1／200）



第14図　塔跡瓦積基壇・階段断面図（1／20）

舗装は自然の色合いにするためFe石灰混合を転圧し仕上げた。

(3)　水路整備工事

塔跡の基壇西北隅を流れる水路は素堀でしかも生活排水溝であるため，景観上，利用上さらには管理上から問題がある。

したがって，ヒューム管（⌀600）を埋設し暗渠排水とした。また，その間の7箇所に管理がしやすいようにグレーチング蓋付き溜め桝を設置した。

(4)　その他の整備工事

塔跡周辺は地形上，雨水は現国分寺の方に流れる量が多いため壁ぎわにそってL型側溝を布設した。また，塔の東南隅は市道にほとんど接しているため，自動車の衝突防止に縁石（200型）を据え付け，その縁石線上に1.20m間隔で車止めを設置した。

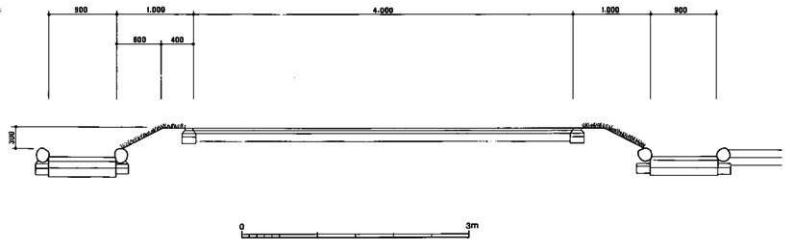
3　平成3年度の整備事業（第12，15，16図，図版21～33）

平成2年度から本格的な整備事業に取り組み始めた筑前国分寺跡の塔跡，回廊跡及び周辺整備事業は，平成2年度の塔跡及び園路整備工事に引き続き，塔跡周辺，回廊跡等の整備を実施した。

全体の事業計画は平成2年度着手であることから，整備にあたっての整地工事，遺構平面復原工事は，既に工法等は決定していたので，これに順守して事業を実施した。

（1）整地工事

筑前国分寺跡を分断する東西に延びる市道の北側は，北東側にゆるやかに高くなっており，塔跡の位置する部分が最も低くなっている。昭和50年代初めの発掘調査と併行して仮整備を行い，回廊跡の仮復原を実施しているが，この際に遺構の保存を図る為に一応の整地工事は実施していたが，



第15図　回廊・雨落溝断面図

部分的には，発掘時に生じた土を使用しているため，覆土上面の表土と不良土を除去し，マサ土に入れ替えて整地工事を行った。

（2）遺構平面復原工事

1）回廊

回廊跡は，昭和51～53年度に盛土による簡易な整備がなされていたが，今回の本格的整備にあたり，事前の発掘調査を実施し，整備にあたっての確認事項に関する資料を得ることができ整備に生かした。

回廊は幅６ｍで，回廊に沿って内と外に雨落溝が巡る。基壇の高さは削平により不明である。これを基に整備を行うものであるが，特に基壇の復原高を決めるのに苦慮した。傾斜地であるため回廊東北隅の高さが，回廊外側との整地レベルとのかね合いで，十分に表現できないなどの問題があったが，塔跡のレベル等を勘案して，全体に回廊外側より30cm高くして回廊部を表現することとした。

回廊基壇は，不良土の除去した後にマサ土により盛土整備し，上面両側に切石の縁石（御影板石で色はサビ系，表面はＪ・Ｂ仕上げ）を据え，その間は脱色アスファルト舗装を行った。これは，密粒土13ｍ／ｍのアスコンを厚さ40mmで舗装し，その表面を厚さ20mmの表層化粧材（パーフェクトカラー）で覆うという工法である。この舗装の路盤工としてクラッシャーランを厚さ100mmで敷き転圧している。両側縁石から雨落溝の間は斜面とし張り芝とした。

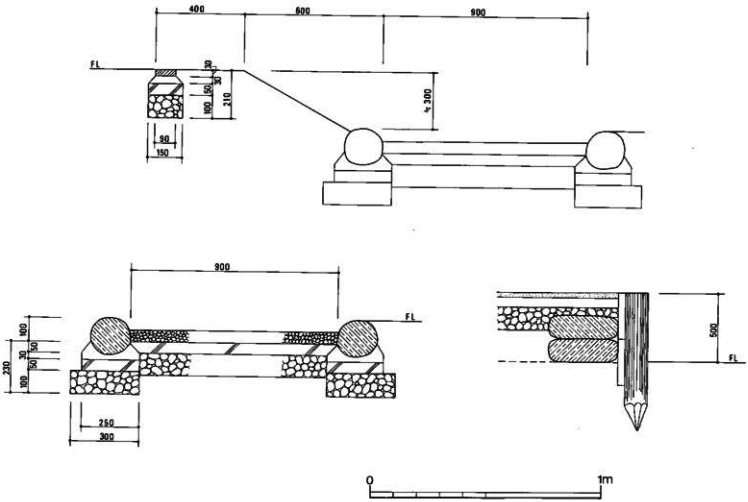
回廊が市道等によって分断される部分の処置については，崩壊を防ぐため，おおむね盛土部の高さにあわせて側面並びの土のうを積み上げ固定し，厚さ36mmの板材と杉丸太によって土留め板柵による処置を取った。板・丸太とも防腐材注入処理を行った。

雨落溝は，調査の成果から塔跡に四周する雨落溝と同様の作り方がなされていたとし，溝の両縁に自然石を並べた。近くの宝満山系で採取される御影系の自然石（φ180mm内外）を使用した。この縁石の一方は回廊基壇の土留めも兼ねたものである。この雨落溝は，整備後の雨水の排水溝として活用するため，溝底はコンクリートとし，ゆるやかな傾斜をつけた。コンクリートの上面に御影系砂利（φ３～10mm内外）を敷きつめた。

なお，塔跡四周の雨落溝も同様の方法であわせて整備した。

2）回廊の内側工事

回廊の内側は土壌固化舗装を行う。クラッシャーランによる厚さ100mmの路盤工事を行い，厚さ



第16図　回廊跡縁石部・雨落溝・回廊土留柵断面図（1／30）

100㎜の土壌固化舗装を行う。土壌固化舗装は，真砂土（0.9㎥），砂（0.1㎥）に固化材であるシュタイン（120kg／㎥）を混合したもので，ローラーによる転圧を行った。真砂土は比重1.8程度とし，塊や砂利土の混ざってないものを使用した。色調は，塔基壇と同系統の色調とした。

3）植栽工事

東西に延びる市道の北側では，回廊の外側は20％の張り芝とした。園路に沿ってサツキツツジを植栽した。整備地区の外周では，特に東側の民家に接する部分について，アラカシを植栽した。

4　平成4年度の整備事業（第17図，図版36～42）

平成4年度の環境整備事業は，講堂跡北側の造成工事及び周辺部の植栽工事，講堂跡瓦積基壇の北側階段修理及び礎石の一部復原工事を実施した。整備の概要は以下の通りである。

(1)　修理，復原工事

1）瓦積階段

講堂跡の瓦積基壇は昭和53，54年度で復原工事を実施したものであるが，復原工事から14年程が経過する中で基壇上層部分の瓦が割れたり，また割れたために欠損する等のいたみが生じている。

これらのいたみの状態は，いたんだ部分に土砂が詰ったり，また芝がこれらの部分を覆って安定しており，早急の修理を要する程ではないが，このうち，北側の瓦積階段部分だけはいたみがひどく，来訪者の利用の便から危険性が伴い，かつ景観を損うものであるため，今回修理を行った。

瓦の損傷は部分的に最下段に及んでいるため，修理に際しては，階段の既存部分をすべて除去し，既存の階段と同一の仕様で新たに構築することとした。この階段は高さ40cm，幅450cm，踏面25cm，蹴上20cmの２段造りで，瓦は平瓦を２つ割りにしたものを用い，目地には三和土（砂・赤土・石灰・にがり２：３：1.5）を充塡した。

２）礎石

昭和53年度の講堂跡瓦積基壇復原の際に，推定礎石位置に３個の礎石を既に据えているが，平成２年度に，当該地北側に位置した太宰府市の北路改修工事で新たに２個の礎石が発見されたため，これを用いて講堂跡の推定礎石位置に据えた。

(2) 講堂跡北側の造成工事

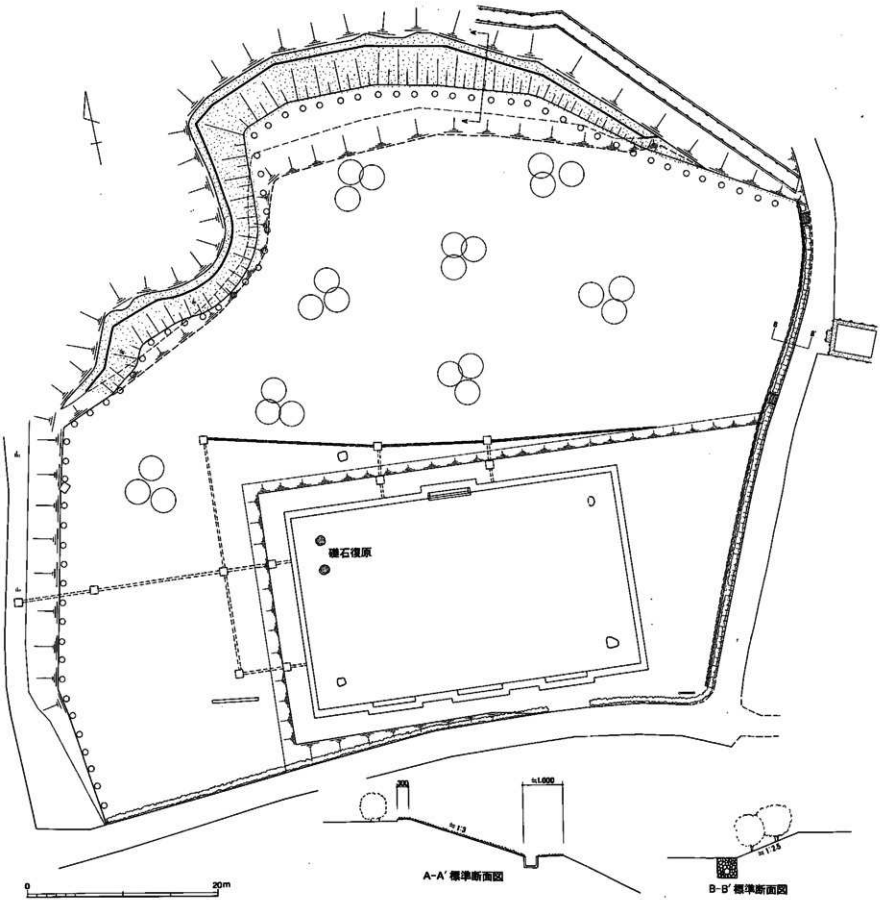
講堂跡北側の整備をするにあたっては，その占める位置から僧房跡の推定がなされる所であるが，昭和54年に実施したトレンチ調査からはその裏づけとなる確証は得られなかった。また今回この部分を整備するにあたっても，前回未調査だった部分を新たに調査して僧房の有無について確認する必要があるとの委員の御指導により，事前に調査を実施した。調査の結果については前述の如く，僧房を特定する遺構は検出されなかったため僧房跡の復原は断念せざるを得なくなった。

従って，今回の整備は講堂北側部分の平坦面を水はけの関係等から，重機によって浅く削平してならし，さらに，北端部の段落ち部分に掘削土や新たにマサ土を200㎡程入れて段をなくして平坦面を北側へ延長して法面（１：３）の整形を行った。

雨水はこの法面を伝って人家に隣接した既存の水路に落ちることとなるため，法面底面にＵ字型側溝を設置して，斜面の雨水をここで受けとめ西側へ流した。また，平坦面部の南側は暗渠排水工事を実施し，既存の集水桝へ接続した。また，東側道路沿い部分の低い法面下面には暗渠排水工事を実施した。

(3) 植栽，修景工事

植栽は，今回造成を行った2000㎡の平坦面の中央部分に，シモクレン，ヤマモミジ，ツブラジイを植え，空間部に芝の種子を吹き付けした。西側端部にはハギ，レンギョウを列植えした。東側の道路沿い部分の低い法面（１：2.5）にはカンツバキを２列千鳥植えによる植栽を行い，景観とともに車止めの機能をもたせ，この部分の２ヵ所に無色防腐剤注入処理した杉丸太材（⌀120）による幅1.2mの２段階段を布設した。南側の既存の法面部分にはカンツバキを点在して植えた。北側の造成した法面350㎡には野芝による張芝を行った。



第17図　僧房跡推定地整備計画図（1／400）

5　おわりに

(1)　今後の課題について

史跡公園の環境整備についての基本的考え方として，歴史的雰囲気の醸成がある。

太宰府市は，特別史跡の大宰府跡・水城跡など，国指定史跡観世音寺太宰府学校院跡など数多くの史跡が点在しており，市全域が古都の名にふさわしい街である。このように歴史的雰囲気の濃厚ななかにある国分寺跡の環境整備は，講堂跡，塔跡，東側回廊跡のみであって，伽藍の中心である金堂跡は現国分寺建物が建っており，中門跡は市道三叉路の下に埋没していると推定される。

環境整備を行うにあたって大きな問題点が二つ考えられる。1つは現国分寺と整備事業地を隔てる南北の境界線上に白壁があること。このことは史跡空間の分断と利用者が全体の空間構成の理解がしにくくはないか。次に狭い史跡空間のなかに南北に生活道路が走っていることである。

この二つの問題を解決する方法として，常緑高木群による植樹帯の設置によって公園外の異質な建築群が園内からなるべく見えないように配慮してその違和感を避け，遠くの山並みが木立を越えて望見できるようにすることによって空間の拡大を図るとともに，自然環境の連続性を保つように工夫すればこのことも可能である。

樹木類が年数を経て大木となると，史跡公園の風格は高まり，歴史的雰囲気を醸成する上で効果を発揮することが出来る。

(2)　史跡公園の活用について

史跡は研究者の研究対象となるとともに，広く一般に公開されて教育や教養の向上，観光の対象として多様に活用されることが望ましい。しかしこの付近に都市公園がないと，史跡公園がレクレーション的に利用される可能性も出てくるが，史跡保存の趣旨を著しく損なうような利用は規制する必要がある。要するに安全管理，清掃，防犯，風紀などの維持に努め，清潔で快適な環境を保ち，多くの人々による公園設置の目的にあった利用促進が図られるべきである。

また，遺構は全体として建築的立体感に乏しいゆえ，予備知識がないと往時の堂塔伽藍配置の姿を想像することは容易でない。したがって，九州歴史資料館や太宰府展示館で，スライドによる解説を聴いたり，館内に復原模型を置くことによって，理解を深めることが出来る。

次に史跡跡のレクレーション的利用であるが，ここでいう利用とは，主として来園者の休息や弁当を食べること，幼児や小学校低学年の簡単な遊戯などであって，芝生や植込を荒らす野球，バスケットボールのようなスポーツ的利用や，場所を独占するゲームなどは好ましくない。

以上要するに，史跡公園は今後如何に適切に管理を行なうかが問題であり，その利用については，史跡公園の趣旨にそうよう利用者の協力もまた不可欠である。

図　版

(3) 塔跡盛土工事状況

(1) 整地工事状況

(4) 塔跡盛土工事状況（洗砂使用）

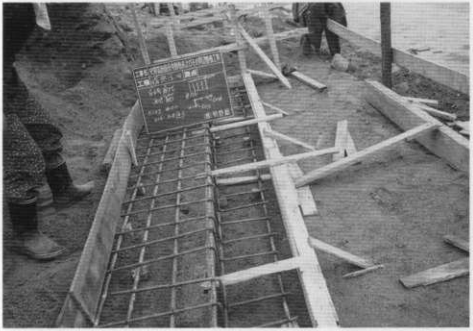
(2) 整地工事状況

図版13

(3) 塔跡基壇基礎コンクリート打設

(1) 塔跡盛土転圧状況

(4) 塔跡基壇石積み状況



(2) 塔跡基壇基礎配筋状況

(3) 塔跡基壇瓦積み状況

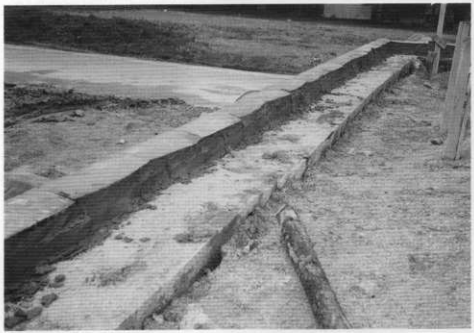
(1) 塔跡基壇石積み状況

(4) 塔跡基壇瓦積み状況

(2) 塔跡基壇石積み状況

図版15

(3) 塔跡模造礎石据付床堀状況



(1) 塔跡基壇瓦積み状況

(4) 塔跡模造礎石据付状況

(2) 塔跡基壇南側石組階段工事

(3) 園路路盤工事

(1) 塔跡基壇表層土壌固化舗装状況

(4) 園路路床(クラッシャーラン)転圧状況

(2) 塔跡基壇表層土壌固化舗装状況

図版17

(3) 園路土壌固化舗装下層工事

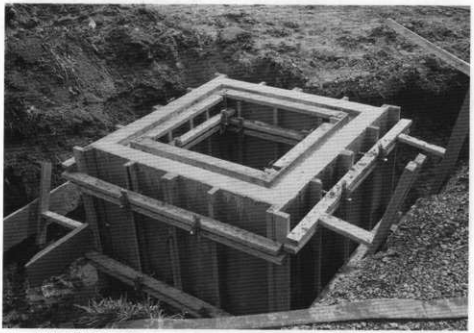
(1) 園路L型側溝付設状況

(4) 園路土壌固化舗装上層工事

(2) 園路路盤工事転圧状況

(3) ガードパイプ付設状況

(1) 水路改修路盤工事



(4) 水路改修溜桝工事

(2) 水路改修U字型側溝付設状況

図版19

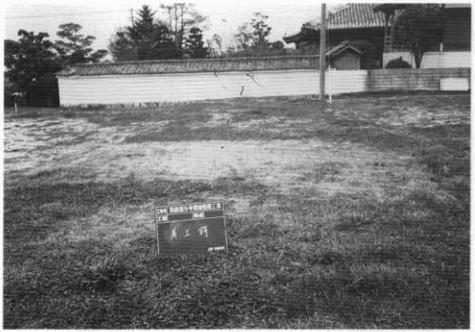
(3) 暗渠排水ヒューム管埋設状況

(1) 水路改修暗渠排水工事

(4) 車止め石柱設置状況

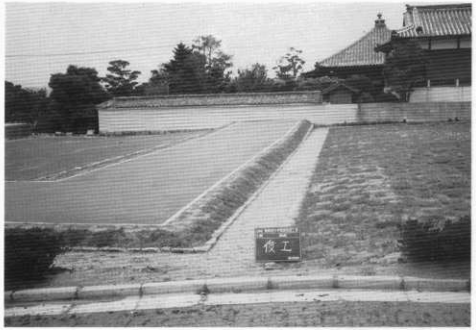
(2) 水路改修暗渠排水工事

(3)　北面回廊北側整備前



(1)　北面回廊整備前

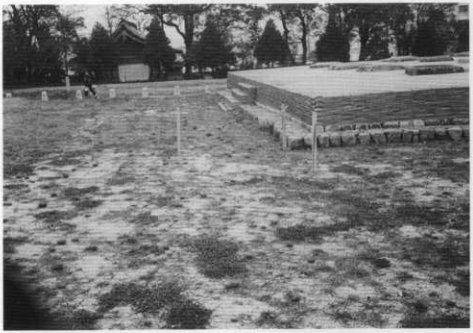
(4)　北面回廊北側整備後



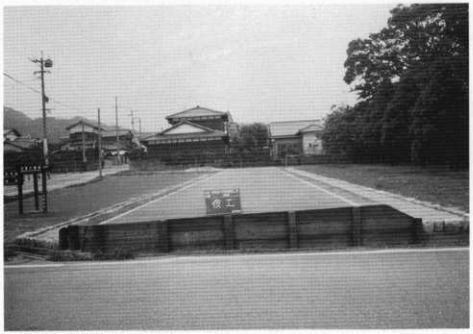
(2)　北面回廊整備後

図版21

(3) 南面回廊整備前

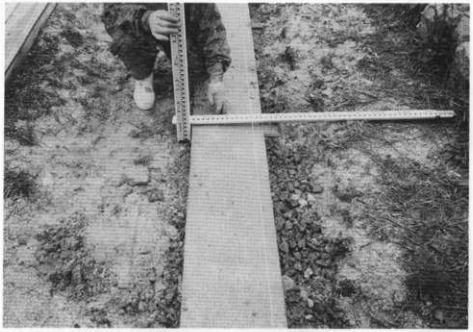


(1) 塔跡東側整備前



(4) 南面回廊整備後

(2) 塔跡東側整備後



(3) 塔跡雨落溝石積み基礎

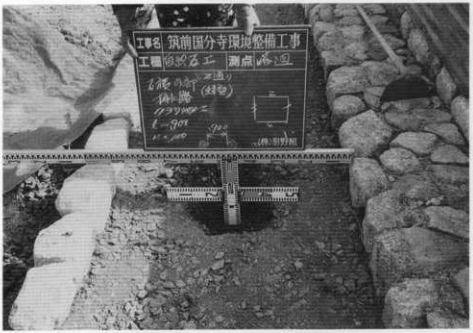
(1) 塔跡雨落溝床掘り状況

(4) 塔跡雨落溝石積み状況

(2) 塔跡雨落溝石積み基礎工事

図版23

(3) 回廊跡雨落溝床掘り状況



(1) 塔跡雨落溝床路盤工事（クラッシャーラン敷設）

(4) 回廊跡雨落溝路盤工事（クラッシャーラン敷設）

(2) 塔跡雨落溝床コンクリート打設状況

(3)　回廊跡雨落溝石積み状況

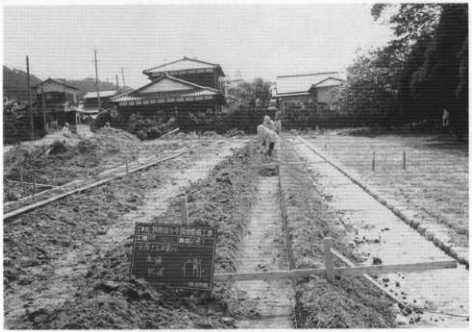
(1)　回廊跡雨落溝石積み基礎コンクリート打設状況

(4)　回廊跡雨落溝石積み状況

(2)　回廊跡雨落溝石積み基礎

(3) 回廊跡基壇法面工事

(1) 回廊跡雨落溝床路盤工事



(4) 回廊跡基壇縁石据付床掘り状況

(2) 回廊跡雨落溝床コンクリート打設状況

(3) 回廊跡基壇縁石据付け基礎工事

(1) 回廊跡基壇縁石据付路盤工事

(4) 回廊跡基壇縁石据付状況

(2) 回廊跡基壇縁石据付基礎コンクリート打設状況

図版27

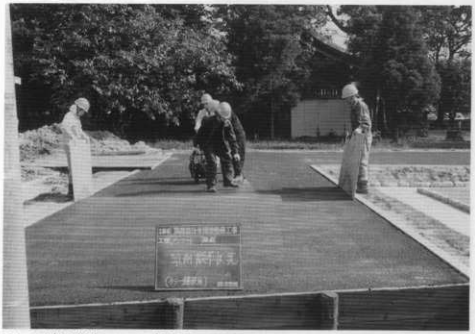
(3) 回廊跡基壇舗装プライムライト乳剤散布状況

(1) 回廊跡基壇土盤整備状況

(4) 回廊跡基壇舗装工事

(2) 回廊跡基壇路盤工事

(3) 回廊跡内側整地転圧状況



(1) 回廊跡基壇アスコン舗装表層乳剤散布状況

(4) 回廊跡内側整地状況

(2) 回廊跡基壇脱色アスファルト舗装工事

図版29

(3) 回廊跡内側土壌固化舗装工事

(1) 回廊跡内側路盤工事

(4) 回廊跡内側土壌固化舗装転圧状況

(2) 回廊跡内側路盤工事

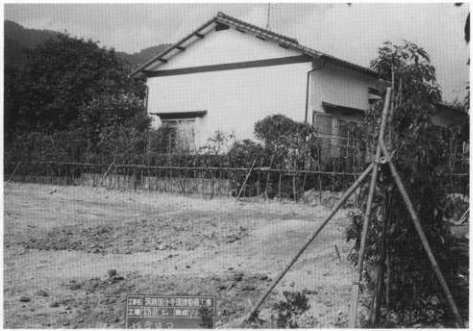
(3) 張芝整地工事

(1) 回廊跡雨落溝砂利敷状況

(4) 張芝工事

(2) 塔跡雨落溝砂利敷状況

図版31

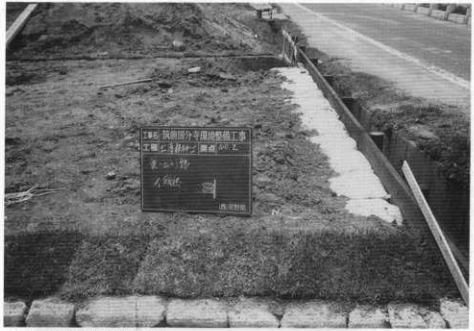


(3) アラガシ植栽状況

(1) アラガシ植栽状況

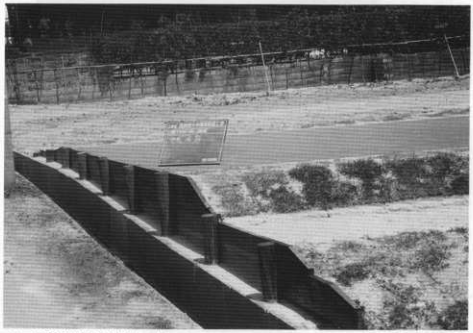
(4) アラガシ植栽状況

(2) アラガシ植栽状況



(3) 回廊基壇土留板柵工事

(1) サツキツツジ植栽状況



(4) 回廊基壇土留板柵工事

(2) サツキツツジ植栽状況

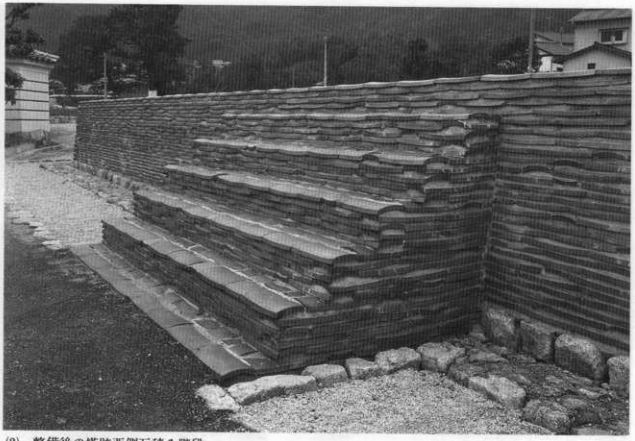
図版33

図版34

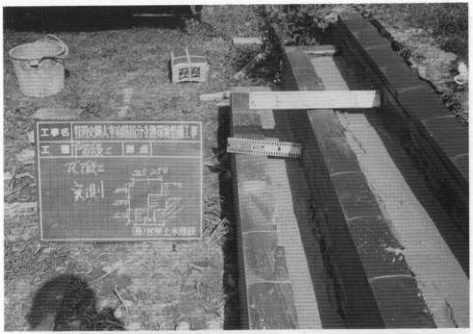
(1) 整備後の状況（東南から）

(2) 整備後の状況（北から）

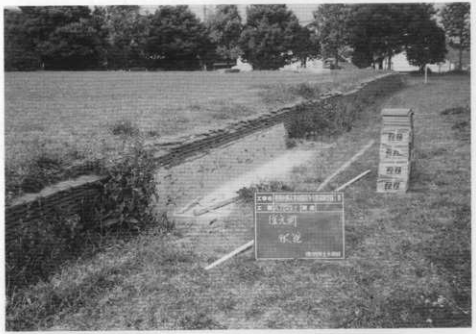
(1)　整備後の塔跡（南から）



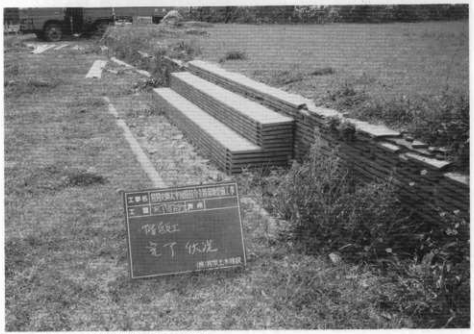
(2)　整備後の塔跡西側瓦積み階段



(3) 講堂跡瓦積階段修理工事



(1) 講堂跡瓦積階段修理工事



(4) 講堂跡瓦積階段修理完了状況

(2) 講堂跡瓦積階段修理工事

(3) 講堂跡東側丸太階段据付工事

(1) 講堂跡礎石据付工事

(4) 講堂跡東側丸太階段据付状況

(2) 講堂跡礎石据付け状況

図版37

(3) 僧房跡推定地整地工事

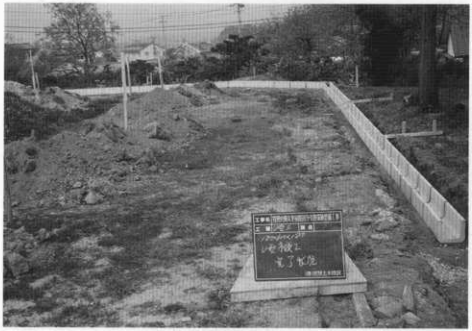
(1) 僧房跡推定地整備前の状況

(4) 僧房跡推定地整地工事

(2) 僧房跡推定地整地工事

(1) 排水溝付設工事

(1) 排水溝付設路盤工事



(4) 排水溝付設状況

(2) 排水溝付設路盤工事

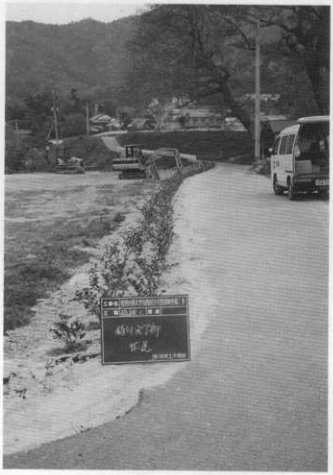
図版39

(1) 法面整地工事

(3) 法面張芝工事

(2) 法面整地工事

(4) 法面の張芝の状況



(1) 講堂跡東側植栽状況

(3) 講堂跡東側暗渠排水管付設状況

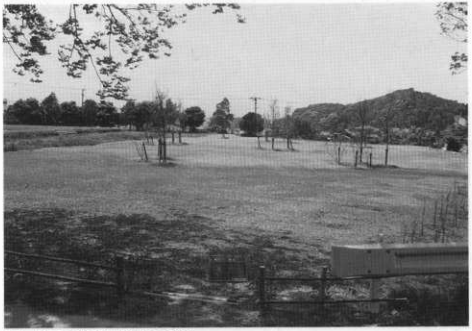
(2) 講堂跡南側植栽状況

(4) 講堂跡東側暗渠排水工事

(1) 僧房跡推定地植栽状況

(3) 僧房跡推定地植栽状況

(2) 僧房跡推定地植栽状況



(4) 僧房跡推定地整備完了状況

報　告　書　抄　録

ふ り が な	しせきちくぜんこくぶんじあと
書　　名	史跡筑前国分寺跡
副　書　名	発掘調査及び環境整備事業実施報告書Ⅱ
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第１１８集
編 著 者 名	川 述 昭 人
編 集 機 関	福岡県教育委員会
所　在　地	〒812　福岡県福岡市博多区東公園７－７　ＴＥＬ　092－641－2903
発 行 年 月 日	西暦１９９４年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
筑前国分寺	太宰府市大字国分			33°31′	130°31′	1990～1993		整備のため

所収遺跡名	種　別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
筑前国分寺	寺　院	奈良時代 平安 〃	溝状遺構 土壙 雨落溝 回廊基壇 柵列状遺構 円形周溝墓	須恵器 土師器 黒色土器 陶磁器 瓦類 塼	

史跡　筑前国分寺跡

発掘調査及び環境整備事業実施報告書Ⅱ
福岡県文化財調査報告書　第１１８集
平成６年３月31日

発　行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園７番７号

印　刷　株式会社川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭６丁目６番41号
電話（092）641－2665

福岡県行政資料	
分類番号 Ｊ日	所属コード ２１３３０５１
登録年度 ５	登録番号 １６